埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第117集

熊 野 遺 跡 XI（第142次・第154次調査）

2010.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第117集

熊野遺跡（くまのいせき）XI（第142次・第154次調査）

2010.3

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、古代には武蔵国に属し、榛澤郡･幡羅郡･男衾郡の３郡にまたがっていたと考えられています。

平成３年の発掘調査では、榛澤郡役所の一部と想定される倉庫群跡が、中宿遺跡から検出されました。県内初の発見例であることから、「中宿古代倉庫群跡」として県指定史跡となりました。

今回報告する熊野遺跡は、この中宿遺跡の南に隣接しています。これまでの170次におよぶ発掘調査の結果、７間×３間の掘立柱建物跡をはじめとする大規模建物群や竪穴住居跡などとともに、道路状遺構・連房式鍛冶工房・石組井戸など特殊な遺構も検出されました。さらに、役人が使用したと考えられる帯金具や円面硯なども数多く出土しており、熊野遺跡は役所的機能を有していたことが想定されています。

本報告書は、個人住宅建築に先立ち平成10年に実施した熊野遺跡142次調査と平成12年に実施した154次調査の成果をまとめたものです。狭小な調査範囲でしたが、154次調査の住居跡からは畿内産土師器が検出され、榛澤群と畿内との密接な交流が想定され、熊野遺跡の性格を解明する上での貴重な資料を追加することができました。本書が学術・教育関係はもとより、文化財の保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成22年３月

深谷市教育委員会

例　　言

1．本書は、埼玉県深谷市岡に所在する熊野遺跡の、平成10年に実施した142次発掘調査と平成12年に実施した154次発掘調査の成果をまとめたものである。

2．文化財保護法第93条の１第２項に基づく事業者宛の指示通知は、次の通りである。
142次調査：平成10年９月１日付　教文第２－91号
154次調査：平成12年５月29日付　教文第２－23号

3．発掘調査は、以下の通り実施した。
142次　担当者：平田重之　　期間：平成10年８月10日～平成10年９月14日
154次　担当者：鳥羽政之　　期間：平成12年５月26日～平成12年６月９日

4．出土品の整理及び実測・観察表の作成は、竹野谷俊夫が行なった。

5．図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が行った。

6．本書の執筆は、第Ⅲ章（２）を竹野谷俊夫が、それ以外を宮本直樹が行った。

7．本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．発掘調査位置図は岡部町全図（1/ 10,000）及び岡部町平面図（1/ 2,500）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/ 25,000）を使用した。

2．遺構実測図は、現場では基本的に1/ 20、カマド実測図を1/ 10とし、本書掲載の段階で1/ 60及び1/ 30とした。遺物については、基本的に1/3で掲載した。

3．図中の方位は、座標北を示す。

4．遺物観察表の数値に（　）のあるものは推定値、《　》のあるものは残存値を示す。

5．土層断面図及びエレベーション図のスクリーントーン（斜線）は、地山を示す。また、図中の数値は、標高値を示す。

6．遺構実測図中の英数字は、以下を表す。
ＳＪ 竪穴住居跡　　ＳＢ 掘立柱建物跡　　ＳＤ 溝跡　　ＳＫ 土坑

目　　次

序

例言・凡例

目次

Ⅰ　発掘調査の経緯及び経過 …… 1
　1．発掘調査の経緯 …… 1
　2．発掘調査・整理報告の経過 …… 2
　3．報告書刊行の組織 …… 4

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境 …… 5
　1．地理的環境 …… 5
　2．歴史的環境 …… 5

Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 7
　1．熊野遺跡の概要 …… 7
　2．発見された遺構と遺物
　　⑴　142次調査 …… 7
　　⑵　154次調査 …… 26

Ⅳ　発掘調査のまとめ …… 44

挿 図 目 次

第１図　熊野遺跡の範囲と調査地点 …… 3
第２図　熊野遺跡142次調査地点位置図 …… 3
第３図　熊野遺跡154次調査地点位置図 …… 4
第４図　周辺の遺跡分布 …… 6
第５図　熊野遺跡142次調査全測図 …… 8
第６図　１号住居跡実測図 …… 9
第７図　１号住居跡カマド実測図 …… 9
第８図　１号住居跡出土遺物実測図(1) ……10
第９図　１号住居跡出土遺物実測図(2) ……11
第10図　１号掘立柱建物跡実測図 ……12
第11図　１号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …14
第12図　２号掘立柱建物跡実測図 ……16
第13図　３号掘立柱建物跡実測図 ……17
第14図　４号掘立柱建物跡実測図 ……18
第15図　５号掘立柱建物跡実測図 ……19
第16図　６号掘立柱建物跡実測図 ……20
第17図　７号掘立柱建物跡実測図 ……21
第18図　１号溝跡実測図 ……21
第19図　１号集石遺構実測図 ……21
第20図　１号集石出土遺物実測図 ……23
第21図　１～３号土坑実測図 ……23
第22図　４～13号土坑実測図 ……24
第23図　14号土坑実測図 ……25
第24図　土坑出土遺物実測図 ……25
第25図　熊野遺跡154次調査全測図 ……27
第26図　１号住居跡実測図 ……29
第27図　１号住居跡カマド実測図 ……29
第28図　１号住居跡遺物出土状況図 ……30
第29図　１号住居跡出土遺物実測図(1) ……31
第30図　１号住居跡出土遺物実測図(2) ……32
第31図　１号住居跡出土遺物実測図(3) ……33
第32図　１号住居跡出土遺物実測図(4) ……34
第33図　１号住居跡出土遺物実測図(5) ……35
第34図　２号住居跡実測図 ……36
第35図　２号住居跡カマド実測図 ……37
第36図　２号住居跡出土遺物実測図(1) ……37
第37図　２号住居跡出土遺物実測図(2) ……38
第38図　１号掘立柱建物跡実測図 ……40
第39図　１号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …41
第40図　土坑、ピット実測図 ……43
第41図　ピット出土遺物実測図 ……44
第42図　熊野遺跡142・154次調査周辺遺構図
……45

写真図版

１　142 次調査区全景、１号住居跡、
　１号掘立柱建物跡、２号掘立柱建物跡、
　３号掘立柱建物跡
２　５号掘立柱建物跡、７号掘立柱建物跡、
　１号住居跡出土遺物、土坑出土遺物
３　154 次調査区全景、１号住居跡、
　２号住居跡、１号掘立柱建物跡、
　１号住居跡出土遺物
４　１号住居跡出土遺物
５　１号住居跡出土遺物、２号住居跡出土遺物、
　１号掘立柱建物跡出土遺物、
　ピット出土遺物

Ⅰ　発掘調査の経緯及び経過

1．発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡や、弥生土器で知られる上敷免遺跡、重要文化財に指定された緑釉手付瓶を出土した西浦北遺跡など、著名な遺跡が多い。

熊野遺跡は、深谷市の北西に位置する。ＪＲ高崎線岡部駅のすぐ北西にあたり、県道蛭川普済寺線と国道17号線に挟まれた範囲である。近年までは駅から少し離れると家も少なく、畑が多く残っていた。しかしながら、『岡中央土地区画整理事業』が平成元年に立ち上がり、事業が進展するに伴い景観が激変しつつある。

この区画整理事業に先立つ発掘調査は、平成４年度から始まり、調査件数は急増した。それ以前の熊野遺跡における調査は、岡部西小学校及び岡部西幼稚園建設に伴い４次の調査が実施されていたにすぎなかったが、平成４年度以降は現在までに163次に及ぶ発掘調査が実施されている。

調査の結果、竪穴住居跡720軒、掘立柱建物跡160棟を始めとして、石組井戸・道路状遺構・土橋状遺構を伴う大溝・連房式鍛冶工房など特殊な遺構も多数検出された。遺物では、多量の土器類のほかに、帯金具・円面硯・唐三彩・和同開珎・刻字紡錘車など一般の集落では見られない出土品が注目される。

今回報告する発掘調査は、アパート建設に先立ち、平成10年度に実施した142次調査と、同じく平成12年に実施した154次調査である。

⑴　熊野142次調査

まず、平成10年６月８日に、柳田慶治氏（以下、「事業主」と記す）から、埋蔵文化財の所在についての照会が岡部町教育委員会（当時、以下「町教委」と記す）にあった。町教委では、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡の範囲内であることを確認し、遺構の存在の有無を確認するための試掘調査が必要である旨を書き添えて、６月８日に事業主に書面にて回答した。その後、試掘調査依頼書が事業主から提出されたので、試掘調査を実施した。調査は、敷地内において１本のトレンチを設定した。調査の結果、竪穴住居跡１軒と土坑・ピット多数を確認した。

これを踏まえ、町教委と事業主で協議を重ねた結果、工事の変更は不可能であり遺跡の破壊は免れないため、記録保存のための発掘調査を町教委が実施することで調整を進めた。事業主もこれを了承し、平成10年８月４日付けで文化財保護法57条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、町教委を経由して埼玉県教育委員会教育長宛に提出された。

これを受けた町教委では、文化財保護法57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を所定の手続きを経て、平成10年８月６日に埼玉県教育委員会教育長へ提出した。

埼玉県教育委員会教育長からの埋蔵文化財発掘届に対する事業主宛の指示通知は、平成10年９月１日付け教文第２－91号においてなされた。

実際の発掘調査は、平成10年８月10日に開始し、同年９月14日まで実施した。

⑵　熊野154次調査

まず、平成12年３月９日に、小林初太郎氏（以下、「事業主」と記す）から、埋蔵文化財の所在についての照会が岡部町教育委員会（当時、以下「町教委」と記す）にあった。町教委では、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡の範囲内であることを確認し、遺構の存在の有無を確認するための試掘調査が必要である旨を書き添えて、３月24日に事業主に書面にて回答した。その後、試掘調査依頼書が事業主から提出されたので、試掘調査を実施した。調査は、敷地内において１本のトレンチを設定した。調査の結果、竪穴住居跡１軒と土坑・ピット多数を確認した。

これを踏まえ、町教委と事業主で協議を重ねた結果、工事の変更は不可能であり遺跡の破壊は免れないため、記録保存のための発掘調査を町教委が実施することで調整を進めた。事業主もこれを了承し、文化財保護法57条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、町教委を経由して埼玉県教育委員会教育長宛に提出された。

これを受けた町教委では、文化財保護法57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を所定の手続きを経て、埼玉県教育委員会教育長へ提出した。

埼玉県教育委員会教育長からの埋蔵文化財発掘届に対する事業主宛の指示通知は、平成12年５月29日付け教文第２－23号においてなされた。

実際の発掘調査は、平成12年５月26日に開始し、同年６月９日まで実施した。

２．発掘調査・整理報告の経過

⑴　熊野142次調査

①　発掘調査の地番及び遺跡番号

熊野遺跡の埼玉県遺跡登録番号は、№63－017である。

調査地点の地番は、深谷市岡字前屋敷3,049番地１である。岡中央土地区画整理事業では、10街区15画地となる。

熊野遺跡では、先述のとおり過去に多数の調査が実施されてきた。深谷市が行なったものと㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものを合わせると、現在170地点に及ぶ。

今回報告分は、平成４年度以降実施した調査のうち142次調査と命名したものである。

②　表土除去

発掘調査は、８月10日から着手した。作業は、まずバックホー0.25による表土除去から始めた。

表土から25～40cm掘り下げると黄褐色ローム層が表れたので、これを遺構確認面とした。

同日午後には、プレハブ･トイレの搬入が終了した。

③　遺構確認

表土除去終了後、調査補助員による遺構確認作業を実施した。その結果、住居跡１軒と掘立柱建物跡他を確認した。

④　遺構掘り下げ及び図化作業

遺構の掘り下げは、調査区西端の１号住居跡から始めた。

基準点測量は、東京航業㈱に委託し、８月31日に実施した。その後、住居床面を検出した段階で、埋没状況を調べるための断面観察を実施し、1/20の縮尺で図化した。

その後ベルトをはずし、遺物の出土状況の写真撮影を行い、1/20の縮尺で図化した。

遺物取り上げ後、床面の精査を行い、柱穴・壁溝などを検出し、掘り下げを実施した。さらに、カマドの調査終了後、完掘状況の写真撮影を実施した。

他の遺構も同様に調査を進めた。全ての遺構の掘り下げが終了した時点で、調査区全体の写真撮影を実施し、その後に全測図を作成した。

調査の全工程が終了し、機材・プレハブ等の撤収が完了したのは、平成10年９月14日のことであった。

⑵　熊野154次調査

①発掘調査の地番及び遺跡番号

熊野遺跡の埼玉県遺跡登録番号は、№63－017である。

調査地点の地番は、深谷市岡字内出300番６と字内出2,816番の一部である。

熊野遺跡では、先述のとおり過去に多数の調査が実施されてきた。深谷市が行なったものと㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものを合わせると、現在170地点に及ぶ。

今回報告分は、平成４年度以降実施した調査のうち154次調査と命名したものである。

②　表土除去

発掘調査は、５月23日から着手した。作業は、まずバックホー0.25による表土除去から始めた。

表土から25～40cm掘り下げると黄褐色ローム層が表れたので、これを遺構確認面とした。

同日午後には、プレハブ･トイレの搬入が終了した。

③　遺構確認

表土除去終了後、調査補助員による遺構確認作業を実施した。その結果、住居跡２軒と掘立柱建物跡他を確認した。

④　遺構掘り下げ及び図化作業

遺構の掘り下げは、調査区南東の１号住居跡から始めた。

基準点測量は、東京航業㈱に委託して、５月24日に実施した。その後、住居床面を検出した段階で、埋没状況を調べるための断面観察を実施し、1/20の縮尺で図化した。

その後ベルトをはずし、遺物の出土状況の写真撮影を行い、1/20の縮尺で図化した。

第１図　熊野遺跡の範囲と調査地点

第２図　熊野遺跡142次調査地点位置図

第３図　熊野遺跡154次調査地点位置図

遺物を取り上げた後、床面の精査を行い、柱穴・壁溝などを検出し、掘り下げを実施した。さらに、カマドの調査が終了したところで、完掘状況の写真撮影を実施した。

他の住居跡も同様に調査を進めた。全ての遺構の掘り下げが終了した時点で、調査区全体の写真撮影を実施し、その後に全測図を作成した。

調査の全工程が終了し、機材・プレハブ等の撤収が完了したのは、平成12年６月９日のことであった。

⑤　整理・報告

発掘調査で検出された遺物の水洗・接合は、平成21年５月より開始した。これと並行して、図面の整理作業を行なった。遺物の実測は、平成21年７月から行い、併せて図版の作成を行なった。11月以降原稿を執筆し、たつみ印刷株式会社に入稿したのは22年２月のことであった。

その後３回の校正を行い、報告書の印刷が完了したのは、平成22年３月26日のことである。

３．報告書刊行の組織

教育長	猪野　幸男
教育次長	石田　文雄
次　長	島崎　　保
課　長	澤出　晃越
課長補佐	吉羽　厚仁
係　長	村松　　篤
主　査	宮本　直樹
主　任	荻野　直美
〃	知久　裕昭
主　事	幾島　　審
主事補	飯島　峻輔
臨時職員	竹野谷俊夫
〃	伊藤万里子
〃	北本ゆかり
〃	佐藤　由江
〃	布施みゆき
〃	松井紀代子

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境

１．地理的環境

深谷市は、埼玉県の北部に位置し、市内をＪＲ高崎線、関越自動車道などが通る。

熊野遺跡は、深谷市岡字熊野他に所在する。ＪＲ高崎線岡部駅の北西に位置し、東西1,300m、南北1,000mの範囲に及ぶ。近年は市街化が進んでいる。

遺跡は、櫛引台地の北部に立地する。南部には標高116mの山崎山とこれに連なる諏訪山が存在する。遺跡の中心から600m北は崖線となり、比高差20mをもって妻沼低地へ移行する。また、櫛引台地の西は藤治川により区分され、本庄台地と接している。

２．歴史的環境

熊野遺跡の立地する櫛引台地北部は、早くから開発が進み、これらに伴う発掘調査の結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から押圧縄文・爪形文土器などが検出され、草創期の土器として注目されてきた。遺構では、四十坂遺跡で前期の竪穴住居跡が、水窪遺跡や菅原遺跡から中期の住居跡が、上宿遺跡で後期の敷石住居跡が検出されている。

弥生時代では、四十坂遺跡より縄文晩期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。その後、平成２年の発掘調査では、再葬墓や土坑墓群が検出された。

古墳時代に至ると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五領～和泉期に至る方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連綿と墳墓が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鋲留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から５世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、６世紀代には、やはり首長墓と想定される寅稲荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・愛宕山古墳（方墳）と順次南東方向へ移動しながら単独で築造されたことが認められる。

この他に、熊野遺跡の東に接する白山古墳群では、６世紀代の古墳跡24基（円墳23、帆立貝式古墳１）が調査された。弾琴埴輪や壺を捧げ持つ巫女の埴輪など６体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土した。

なお、櫛引台地北部における古墳時代の集落は、現在のところ中宿遺跡や上宿遺跡など数か所が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛引台地以外に分布の中心が認められる。

奈良～平安時代になると、様相は一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如集落が営まれる。これまでに163次に及ぶ調査が実施され、720軒を超える竪穴住居跡、160棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・連房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、円面硯・帯金具・唐三彩の陶枕・緑釉段皿、刻字紡錘車・陶製仏殿・置きカマドなど他の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

なお、集落の開始時期は、131次調査１・２号竪穴住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、７世紀第３四半期と考えられている。さらに、１次調査において検出された７間×３間をはじめとする大型建物の存在から、該期の熊野遺跡は初期評家と想定されている。

また、櫛引台地縁辺部に位置する中宿遺跡からは、大規模な総柱式建物跡20棟が規則的に配置された状態で検出された。榛沢郡家に伴う正倉跡と推定され、７世紀後半の成立であることから熊野遺跡との関連が想定される。これと前後して台地直下には「滝下大溝」が掘削された。その北側には条里遺構が検出されたことから、灌漑と運河の機能を併せ持っていたことが考えられる。

さらに、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡では、８世紀第２四半期と考えられる蓮華文軒丸瓦などが多量に出土する範囲があり、廃寺跡と推測されてきた。平成13年度に町教委が実施した確認調査により、版築された基壇状遺構が検出された。近接する住居跡から「榛」の刻字瓦や「寺」と墨書された土師器坏も出土し、寺院跡であることが立証された。

このように、奈良～平安時代の櫛引台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

古代から中世にかけては、まず岡部六弥太館跡があげられる。方形に廻る堀跡や井戸、土壙墓などが検出された。同様な堀跡は、熊野遺跡と白山遺跡からも検出され、館跡に付属するものと推定されている。西龍ヶ谷遺跡では、軸を揃えて並んだ６棟の掘立柱建物群が確認された。

1．熊野遺跡　（律令期集落・官衙・中世居館）
2．中宿遺跡　（郡衙正倉・律令期集落）
3．滝下遺跡　（河川跡・律令期集落）
4．岡廃寺　（寺院跡・古墳～律令期集落）
5．岡部条里遺跡　（古墳集落・条里水田・律令期居宅）
6．砂田前・樋詰遺跡（古墳～平安集落）
7．白山遺跡　（古墳群・律令期集落・中世居館）
8．新田遺跡　（律令期集落）
9．上宿遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
10．四十坂遺跡　（縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群）
11．原ケ谷戸遺跡　（縄文・古墳集落・古墳群）
12．水窪遺跡　（縄文・古墳集落・周溝墓・古墳群）
13．新井遺跡　（律令期集落）
14．東五十子遺跡　（古墳・中世集落）
15．六反田遺跡　（古墳・中世集落）
16．大寄遺跡　（縄文・弥生～律令期集落）
17．西浦北遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
18．東光寺裏遺跡　（縄文・平安集落）
19．榛沢六郎成清館跡（中世）
20．石蒔遺跡　（古墳～平安集落・周溝墓）
21．地神祗遺跡　（古墳～平安集落）
22．千光寺遺跡　（古墳群・平安集落）
23．西谷遺跡　（縄文）
24．茶臼山遺跡　（古墳群）
25．伝上杉館跡　（中世）
26．山河聖天社　（中世）
27．西龍ヶ谷遺跡　（律令期集落・中世居館）
28．伝岡部六弥太館跡（中世）
A．四十坂浅間山古墳（円墳）
B．寅稲荷塚古墳　（前方後円墳）
C．お手長山古墳　（帆立貝式古墳）
D．前原愛宕山古墳　（方墳）
E．内出八幡塚古墳　（円墳）
F．四十塚古墳群　（古墳群）

第４図　周辺の遺跡分布

Ⅲ　発見された遺構と遺物

１．熊野遺跡の概要

熊野遺跡は、櫛引台地北端部に展開する集落跡である。遺跡の標高は55m前後であり、南西から北東に向かって緩やかな傾斜を有している。遺跡から北東へ約600mで台地縁辺部に達し、眼下には利根川及び小山川により開析された妻沼低地が開けている。沖積地との比高差は、約20m程である。遺跡は、南北約1,000m、東西約1,300mを測り、当地域最大の規模を誇る。

熊野遺跡は、主として奈良・平安時代～中世にかけて営まれた複合遺跡である。それ以前の櫛引台地北部は、古墳群が造営される墓域であった。熊野遺跡内にも、終末期の帆立貝式古墳であるお手長山古墳と、これに続くと考えられる内出八幡塚古墳（円墳）が築造された。その後７世紀中葉から後半にかけて、遺跡が形成されたことが、これまでの発掘調査により明らかとなっている。

発掘調査は、まず岡部西小学校建設に先立ち、昭和52年～54年に実施されたのが始まりである。３次にわたる調査の結果、奈良～平安時代を中心とした竪穴住居跡83軒、掘立柱建物跡２棟が検出された。遺物では、円面硯や帯金具などの出土が注目される。

また、平成４年度から始まった岡中央土地区画整理事業に伴う発掘調査は、現在までに163次にわたり実施されている。調査の結果、竪穴住居跡720軒、掘立柱建物跡160棟あまりが検出された。このほか、７間×３間の大型建物や、大規模な石組井戸跡、連房式鍛冶工房、大溝等が特筆される。出土遺物では、多量の土器類のほかに、帯金具・円面硯・唐三彩・和同開珎・刻字紡錘車なども特筆される。さらに、鎌・鋤先などの農耕具や刀子などの鉄製品も多いが、鉄鏃や小札などの武器・武具の出土も注目される。

更に、これらと並行して実施された㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団の４次の調査により、竪穴住居跡201軒、掘立柱建物跡110軒、道路状遺構、井戸跡４基などが検出されている。遺物では、陶棺や置きカマドなども出土している。

遺跡が形成されたのは、131次調査１号・２号住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、７世紀第３四半期と推定される。その後、10世紀代まで集落が営まれていたことが判明している。

中世では、１辺が約95mの方形区画溝が検出されており、館跡の存在が想定される。また、現在までに２箇所の墓域が確認されており、多数の土壙墓から銭貨やカワラケが出土している。地下式坑も検出されており、深さ５mの規模を有するものもある。さらに、遺跡の中ほどに「岡の五輪塔」が建ち、市の指定文化財となっている。

２．発見された遺構と遺物

⑴　142次調査

発掘調査地点は、深谷市岡字前屋敷3,049番地１の一部である。岡中央土地区画整理事業では、10街区15画地となる。平成４年度以降に実施された熊野遺跡における発掘調査では、142次調査にあたる。

調査により検出された遺構は、奈良～平安時代の竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡７棟、溝１条、集石遺構１基、土坑14基、ピット多数である。

以下、順を追って詳述する。

１号竪穴住居跡

２Ａ～２Ｂグリッドにかけて位置する。西コーナー周辺が調査区域外にあり全容は不明である。

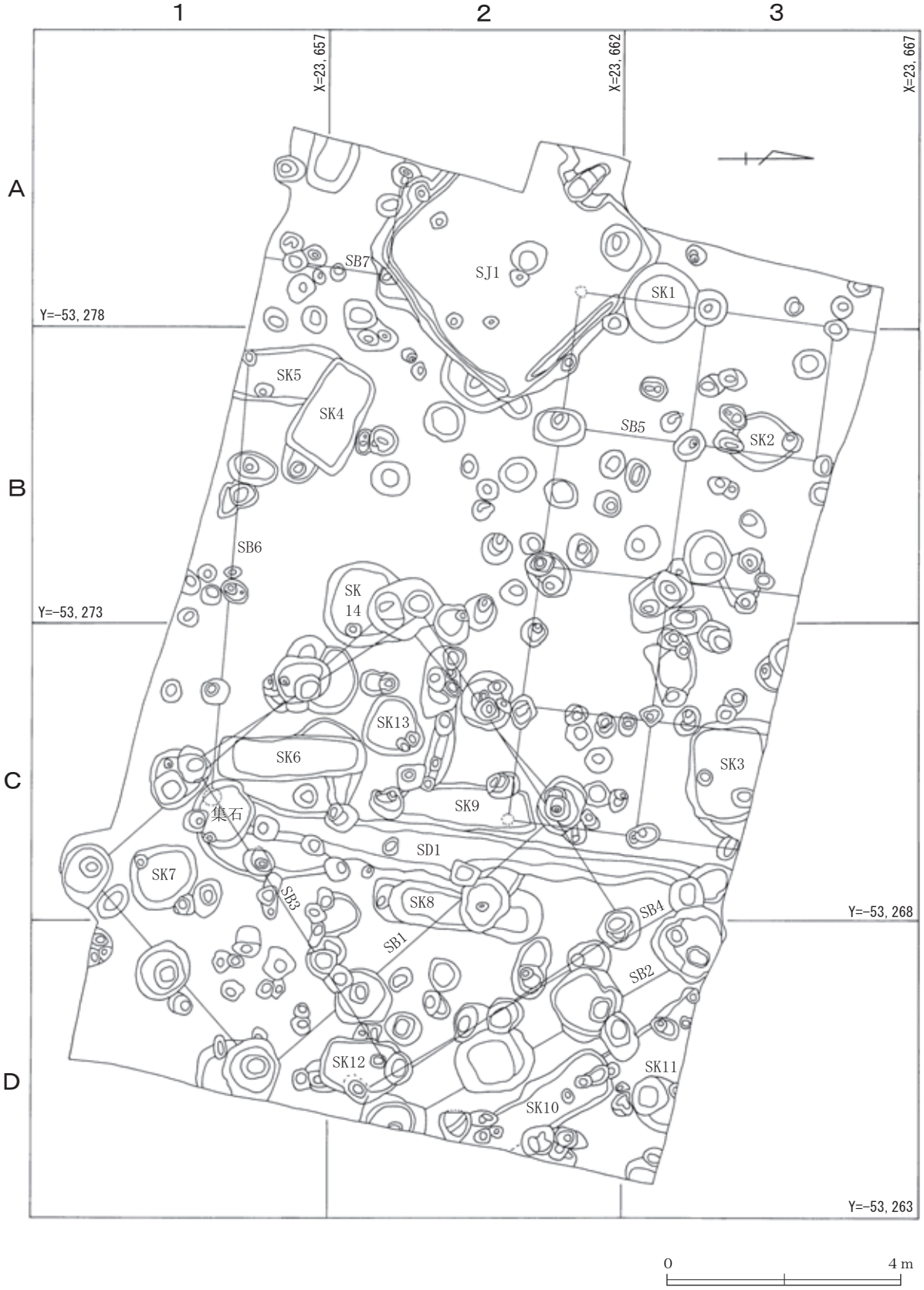
規模は、南北3.88m、東西3.86mを測り、平面形態は方形を呈すると想定される。主軸方位は、N-40°-Wを示す。

壁はやや角度をもって掘り込まれ、床面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、36cm前後を測る。

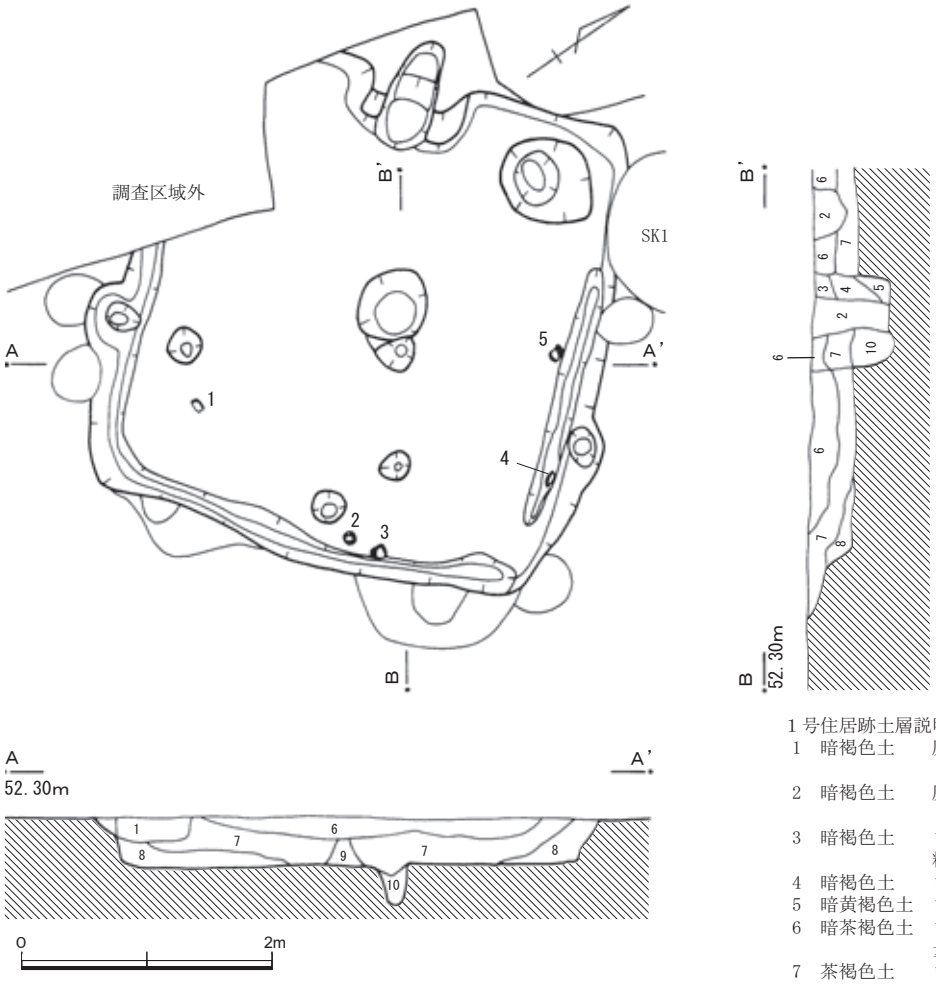
カマドは、北壁を削り出し構築されていた。袖は粘土の造り付けで、右袖60cm、左袖54cmを測る。燃焼部は、長さ90cm、最大幅41cmを測る。底面は平坦であるが奥に向かい若干深くなり、その後は煙道に向かい角度をもって立ち上がる。

壁溝は、西壁から南壁にかけてと東壁の一部で検出された。幅は20～30cm、床面からの深さは５cm程を測る。

土坑は、２基が検出された。１基は北コーナー付近に位置し、平面形態は不整円形を呈する。規模は、直径82cm、床面からの深さ５cmを測る。もう１基は、



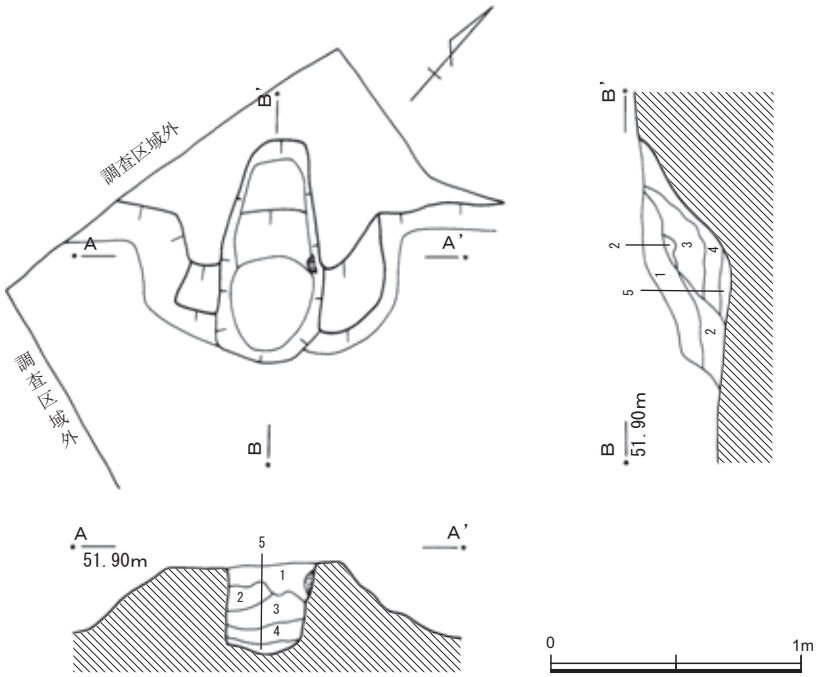
第５図　熊野遺跡142次調査全測図



第６図　１号住居跡実測図

１号住居跡土層説明

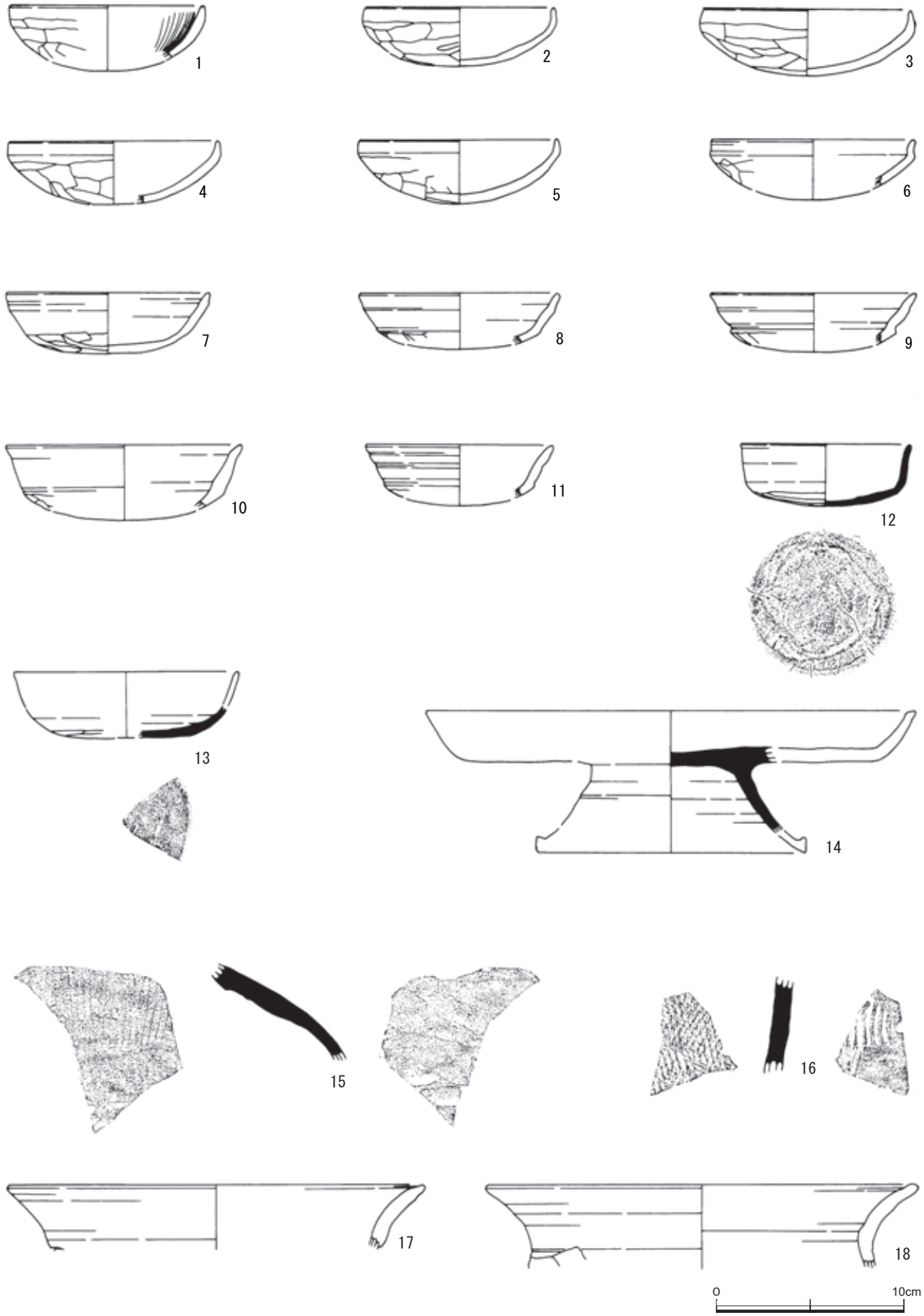
1	暗褐色土	灰褐色土・鉄分を多量、ローム粒・ロームブロックを少量含む。
2	暗褐色土	灰褐色土を多量、ロームブロック・鉄分・炭化物を少量含む。
3	暗褐色土	ローム粒・炭化物粒を少量、焼土粒を微量含む。
4	暗褐色土	ローム粒をやや多く含む。
5	暗黄褐色土	ロームブロックを多量含む。
6	暗茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量、パミスを微量含む。
7	茶褐色土	ローム粒多量、白色粘土粒少量。
8	暗褐色土	ローム粒・黒色土ブロック多量。
9	暗黄褐色土	ロームブロックを多量含む。
10	暗黄褐色土	ロームブロック（大）多量含む。



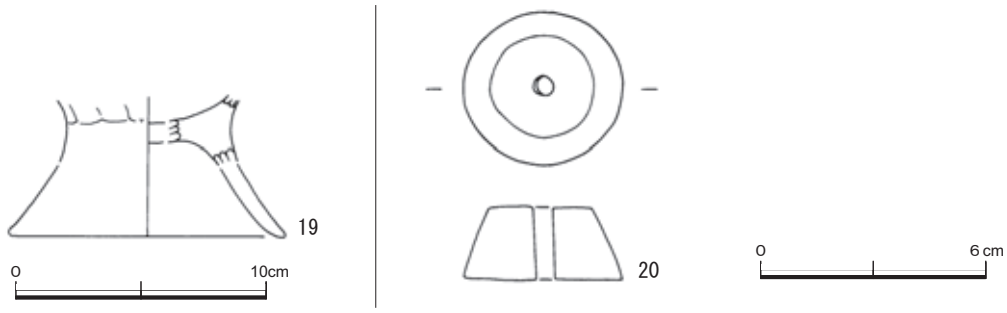
１号住居跡カマド土層説明

1	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロック少量。
2	黒褐色土	ローム粒・焼土ブロック・焼土粒多量。
3	暗黄褐色土	ローム粒・炭化物粒多量。
4	黒褐色土	ローム粒・焼土ブロック多量。
5	黒褐色土	ローム粒・焼土粒多量。やや軟質。

第７図　１号住居跡カマド実測図



第８図　１号住居跡出土遺物実測図(1)



第９図　１号住居跡出土遺物実測図(2)

１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(10.1)	(3.5)		橙褐色	普通	石英、角閃石	図示15%	覆土、内面放射状暗文
2	坏	(9.9)	3.1		にぶい褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	45%	覆土
3	坏	(10.9)	3.5		橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	45%	
4	坏	(11.0)	(3.3)		灰橙褐色	良好	石英、角閃石(精良)	図示35%	
5	坏	(10.4)	3.4		灰橙～黒褐色	普通	石英、角閃石	25%	覆土
6	坏	(10.6)	(3.2)		暗赤褐色	良好	石英、角閃石、黒色粒	図示10%	覆土
7	坏	10.6	3.2		にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石、赤色粒	55%	覆土
8	坏	(10.4)	(3.0)		外、橙色 内、灰黒色	良好	石英、角閃石	図示20%	カマド覆土
9	坏	(10.8)	(3.1)		黄橙色	普通	石英、角閃石	図示12%	覆土
10	坏	(12.3)	(4.0)		橙褐色	普通	石英、角閃石、白色粒	図示10%	覆土
11	坏	(9.8)	(3.2)		にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石	図示10%	覆土
12	須恵坏	9.0	3.3		灰黄褐色	普通	石英、長石	100%	手持ち篦ケズリ、末野産
13	須恵坏		《1.6》		灰白色	不良	石英、チャート、黒色粒	図示20%	覆土、手持ち篦ケズリ、末野産、磨滅あり
14	須恵脚付盤		《4.5》		灰白色	やや悪	石英、黒色粒、砂粒	図示70%	末野産、磨滅あり
15	須恵甕				にぶい灰褐色	やや悪	石英、チャート	肩部破片	覆土、内面、あて具痕 外面、平行叩き、末野産
16	須恵甕				淡灰色	普通	長石、黒色粒	胴部破片	覆土、内面、青海波叩き 外面、平行叩き、末野産
17	甕	(21.8)	《3.4》		明橙色	普通	石英、角閃石、長石、パミス、砂粒	図示10%	覆土
18	甕	(22.6)	《4.4》		暗橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	図示10%	覆土
19	台付甕		《2.6》		にぶい暗橙褐色	普通	石英、角閃石、長石、パミス、砂粒	図示30%	
20	石製紡錘車	長径4.2	短径2.7	厚さ1.9	孔径0.5	重さ49.4g	石質・流紋岩	100%	

床面中央に位置し、平面形態は不整円形を呈する。規模は、直径65cm、床面からの深さ28cmを測る。

ピットは、床面中央から南側にかけて４基が検出された。平面形態は、いずれも不整円形を呈する。規模は、直径27cm ～ 31cm、床面からの深さ16cm ～ 32cmを測る。

遺物は、土師器の坏・甕・台付甕、須恵器の坏・脚付盤・甕、石製紡錘車が出土した。時期は７世紀後半と考えられる。

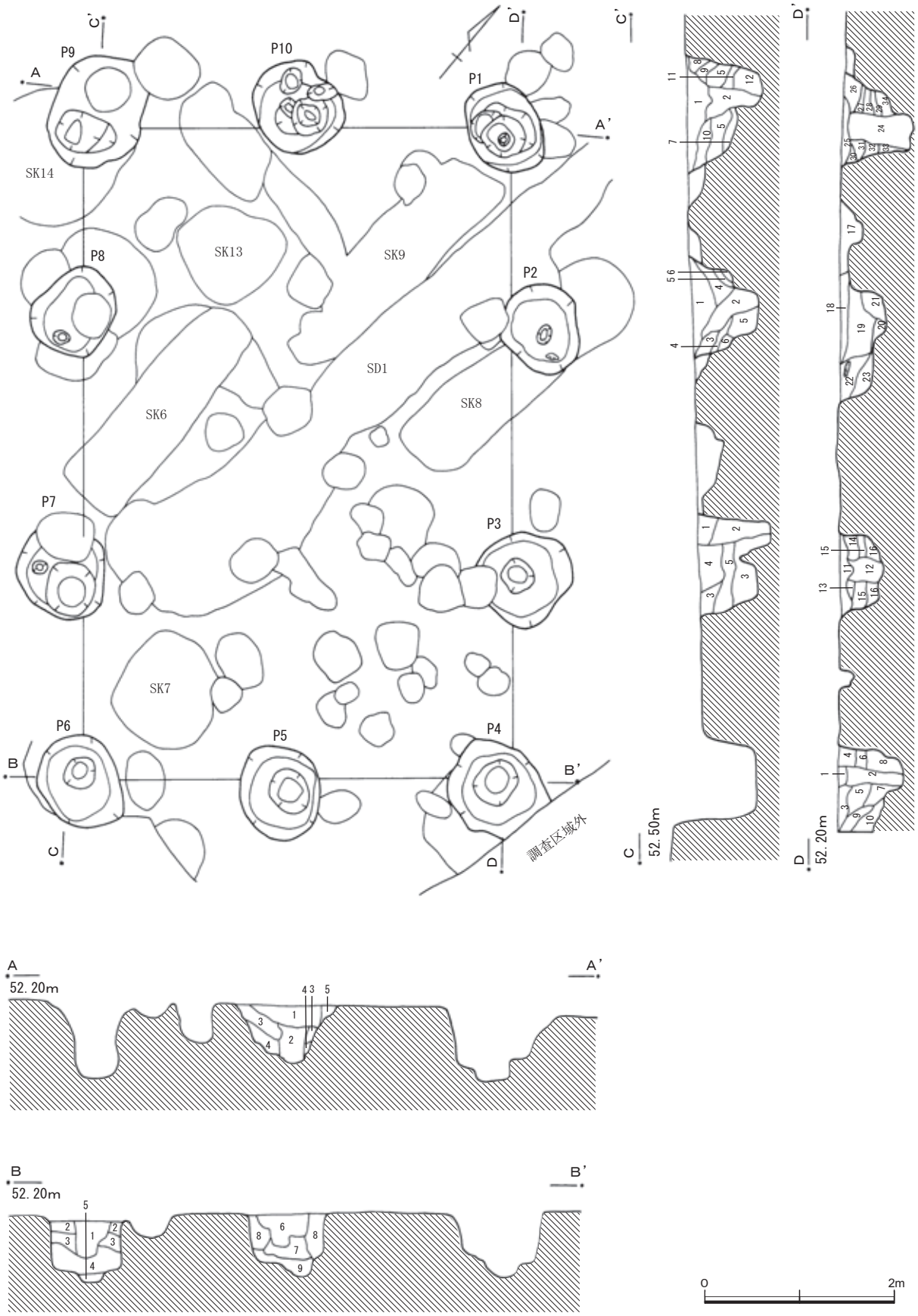
１号掘立柱建物跡

Ｃ１・２～Ｄ１・２グリッドにかけて位置する。３号掘立柱建物跡・１号溝跡などと重複する。

梁行３間、桁行２間の側柱建物跡である。規模は、梁行6.80m、桁行4.50mを測り、柱間は2.25mである。主軸方位は、N-40°-Wを示す。

柱の堀り方は不整楕円形で、長軸96cm ～ 110cm、確認面からの深さ46cm ～ 78cmを測る。大半の掘り方の底部から柱の当たり痕が検出された。また、断面観察により、柱が抜き取られずに、建物が廃墟された状況が確認された。

遺物は、土師器の坏・皿、須恵器の坏・蓋・盤・長頸瓶などが、掘り方の覆土から出土した。時期は８世紀第１四半期と考えられる。



第10図　１号掘立柱建物跡実測図

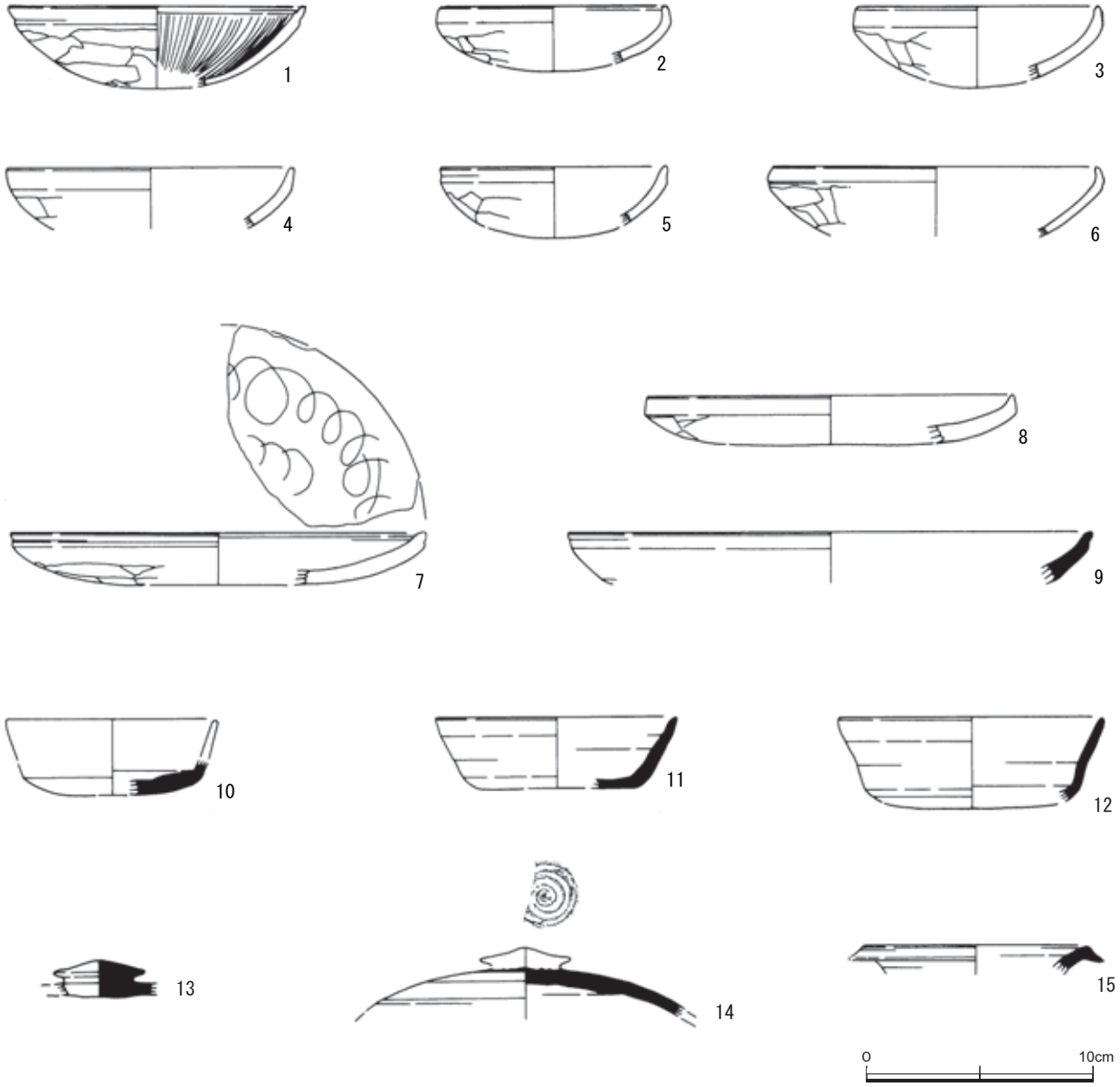
１号掘立柱建物跡土層説明

Ａ－Ａ’
1　暗茶褐色土　ローム粒を少量、パミス・炭化物を微量含む。しまりなし、粘性なし。
2　暗褐色土　ローム粒・炭化物粒・パミスを微量含む。しまりなし、粘性なし。
3　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまり弱い、粘性なし。
4　暗黄褐色土　ロームブロックを多量、ローム粒を少量含む。しまりあり、粘性あり。
5　暗茶褐色土　ローム粒・パミスを多量含む。しまりあり、粘性なし。

Ｂ－Ｂ’
1　暗褐色土　ローム粒を微量含む。しまり弱い、粘性なし。
2　暗茶褐色土　ローム粒を多量含む。しまり弱い、粘性なし。
3　暗茶褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまり弱い、粘性なし。
4　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまり弱い、粘性弱い。
5　黒褐色土　黒色土主体。ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性なし。
6　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性なし。
7　茶褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまり弱い、粘性なし。
8　茶褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまり弱い、粘性なし。
9　暗茶褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性なし。

Ｃ－Ｃ’
1　暗褐色土　灰色粘土ブロック・ローム粒・炭化物を少量含む。やや砂質。しまりあり、粘性弱い。
2　黒褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりあり、粘性弱い。
3　暗黄褐色土　２層をベースにローム粒・ロームブロックを充填する。しまり弱い、粘性あり。
4　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまりあり、粘性弱い。
5　暗褐色土　黒色土・ロームブロックを多量含む。しまりあり、粘性弱い。
6　黄褐色土　５層をベースにローム粒・ロームブロックを充填する。しまりあり、粘性あり。
7　暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまり弱い、粘性なし。
8　黄褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりあり、粘性なし。
9　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性なし。
10　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまりなし、粘性なし。
11　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまりややあり、粘性なし。
12　暗茶褐色土　ローム粒を少量含む。しまりややあり、粘性なし。

Ｄ－Ｄ’
1　灰茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまりなし、粘性なし。
2　暗褐色土　ローム粒を微量含む。しまりなし、粘性なし。
3　暗褐色土　ローム粒・パミスを微量含む。しまりなし、粘性なし。
4　茶褐色土　ローム粒を多量、パミスを少量含む。しまりなし、粘性なし。
5　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性なし。
6　暗茶褐色土　ローム粒を多量含む。しまりなし、粘性なし。
7　暗褐色土　ローム粒を微量含む。しまりなし、粘性なし。
8　暗茶褐色土　ローム粒を多量含む。しまりなし、粘性なし。
9　茶褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりなし、粘性なし。
10　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまりなし、粘性なし。
11　茶褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりなし、粘性なし。
12　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまりややあり、粘性なし。
13　茶褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性なし。
14　暗黄褐色土　ローム粒を少量、ロームブロックを多量含む。しまりあり、粘性なし。
15　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまりなし、粘性なし。
16　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまり強い、粘性強い。
17　茶褐色土　ローム粒を多量、ロームブロック・パミスを少量含む。しまりなし、粘性なし。
18　茶褐色土　ローム粒・パミスを少量含む。しまりなし、粘性なし。
19　茶褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりなし、粘性なし。
20　暗黄褐色土　ロームブロックを多量含む。しまり強い、粘性強い。
21　黄褐色土　ハードローム主体。しまり強い、粘性強い。
22　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック・パミスを多量含む。しまりなし、粘性なし。
23　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまりなし、粘性なし。
24　暗褐色土　ローム粒を多量含む。しまりややあり、粘性なし。
25　茶褐色土　ローム粒を少量、パミスを多量含む。しまりあり、粘性なし。
26　黄褐色土　ハードローム主体。しまり強い、粘性あり。
27　暗茶褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性なし。
28　暗黄褐色土　ローム粒を多量含む。しまりなし、粘性ややあり。
29　茶褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性なし。
30　黄褐色土　ロームブロックを多量、パミスを少量含む。しまりあり、粘性あり。
31　暗褐色土　ローム粒・パミスを微量含む。しまりあり、粘性なし。
32　暗茶褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまり弱い、粘性なし。
33　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまり弱い、粘性なし。
34　暗茶褐色土　ローム粒を少量、ロームブロックを多量含む。しまり弱い、粘性なし。



第11図　１号掘立柱建物跡出土遺物実測図

１号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎土	残存率	備　　考
1	坏	(12.8)	(3.6)		橙色	良好	石英、角閃石(精良)	図示30%	内面放射状暗文
2	坏	(9.8)	(2.9)		灰橙褐色	良好	雲母、角閃石(精良)	図示15%	
3	坏	(10.6)	(3.0)		橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス、微砂粒	図示20%	
4	坏	(12.3)	《2.7》		橙色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示10%	
5	坏	(9.8)	(3.1)		橙色	普通	石英、角閃石、赤色粒	図示20%	
6	坏	(14.2)	《3.0》		橙褐色	普通	石英、雲母、赤色粒	図示10%	
7	皿	(18.0)	(2.2)		赤褐色	普通	石英、角閃石、長石、微砂粒	図示20%	内面螺旋暗文、磨滅あり
8	皿	(16.0)	(2.1)		暗灰褐色	普通	石英、微砂粒	図示17%	内面に油脂状物付着
9	須恵盤	(22.9)	《2.2》		淡黄灰色	やや悪	石英、長石、片岩、雲母、赤色粒、チャート	図示７%	手持ち篦ケズリ、末野産
10	須恵坏		《1.6》	(7.8)	灰褐色	やや悪	長石、赤色粒	図示25%	全面回転篦ケズリ、末野産
11	須恵坏	(10.5)	3.1	(7.0)	淡灰色	良好	石英、黒色粒、片岩	図示20%	手持ち篦ケズリ、末野産
12	須恵坏	(11.5)	(4.0)		明灰色	普通	石英、長石、片岩	図示25%	回転篦ケズリ、末野産
13	須恵蓋	鈕径4.0			明灰色	普通	長石、片岩、黒色粒	破片	末野産
14	須恵蓋		《2.1》		暗灰赤褐色	良好	石英、長石	図示30%	末野産
15	須恵長頸瓶	(9.8)	《1.3》		灰赤褐色	良好	チャート、長石	図示15%	末野産

２号掘立柱建物跡

Ｄ２～Ｄ３グリッドに位置する。大半が調査区域外にあるため、規模・主軸方位等は不明である。

確認できたのは、直線的に並ぶ柱跡４基である。４基の距離は6.0mを測り、柱間は2.0mである。

堀り方の平面形態は、隅丸方形を呈する。規模は、直径115cm ～ 133cm、確認面からの深さ54cm ～ 76cmを測る。１号・２号・４号柱穴の底部から、柱の当たり痕が検出された。また、断面観察により、柱が抜き取られずに、建物が廃墟された状況が確認された。

遺物は、出土しなかったが、覆土の状況から古代のものと推測される。

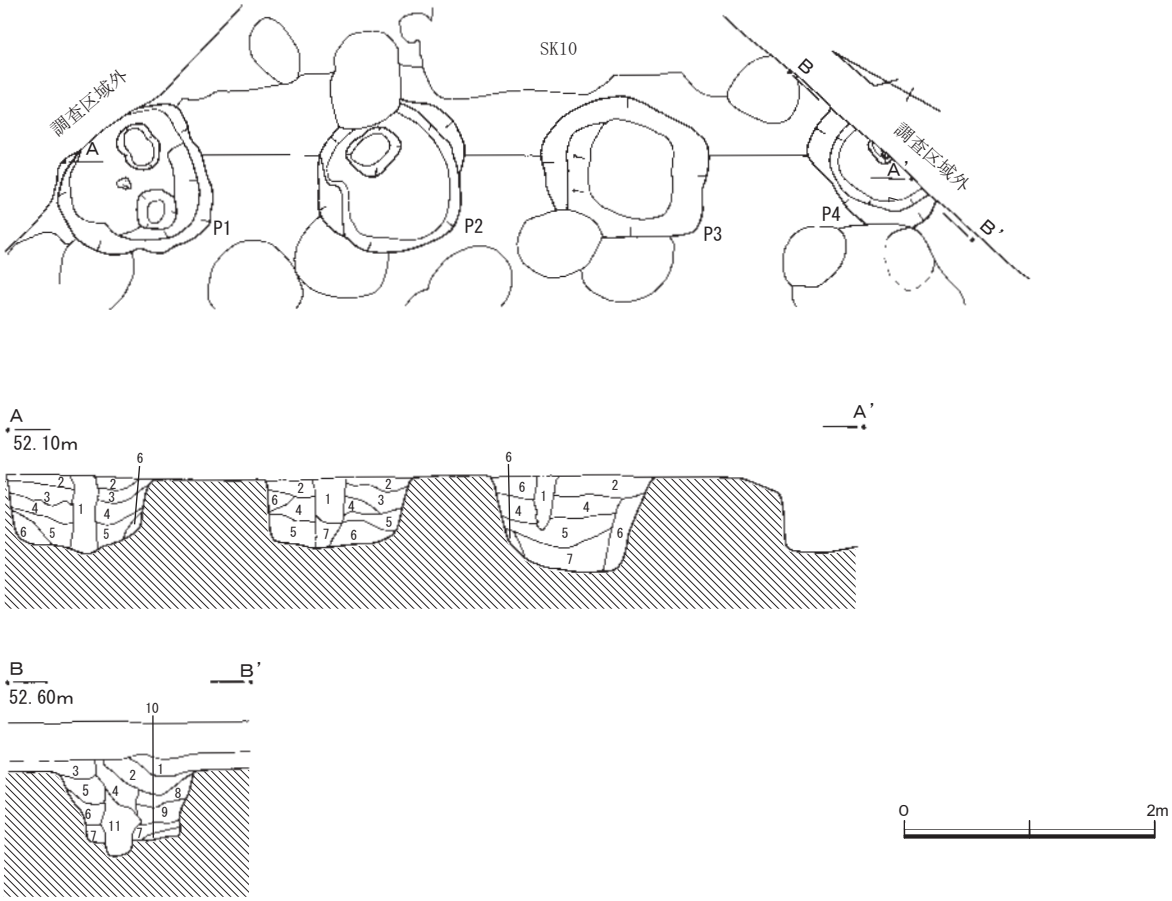
３号掘立柱建物跡

Ｃ１～Ｃ２～Ｄ２グリッドにかけて位置する。１号掘立柱建物跡・１号溝跡などと重複する。

梁行３間、桁行２間の側柱建物跡である。規模は、梁行6.33m、桁行4.60mを測り、柱間は梁行2.1m、桁行2.3mである。主軸方位は、N-57°-Eを示す。

柱の堀り方は不整円形で、直径46cm ～ 75cm、確認面からの深さ55cm ～ 90cmを測る。３・５・７・８号掘り方の底部から柱の当たり痕が検出された。

遺物は、出土しなかった。



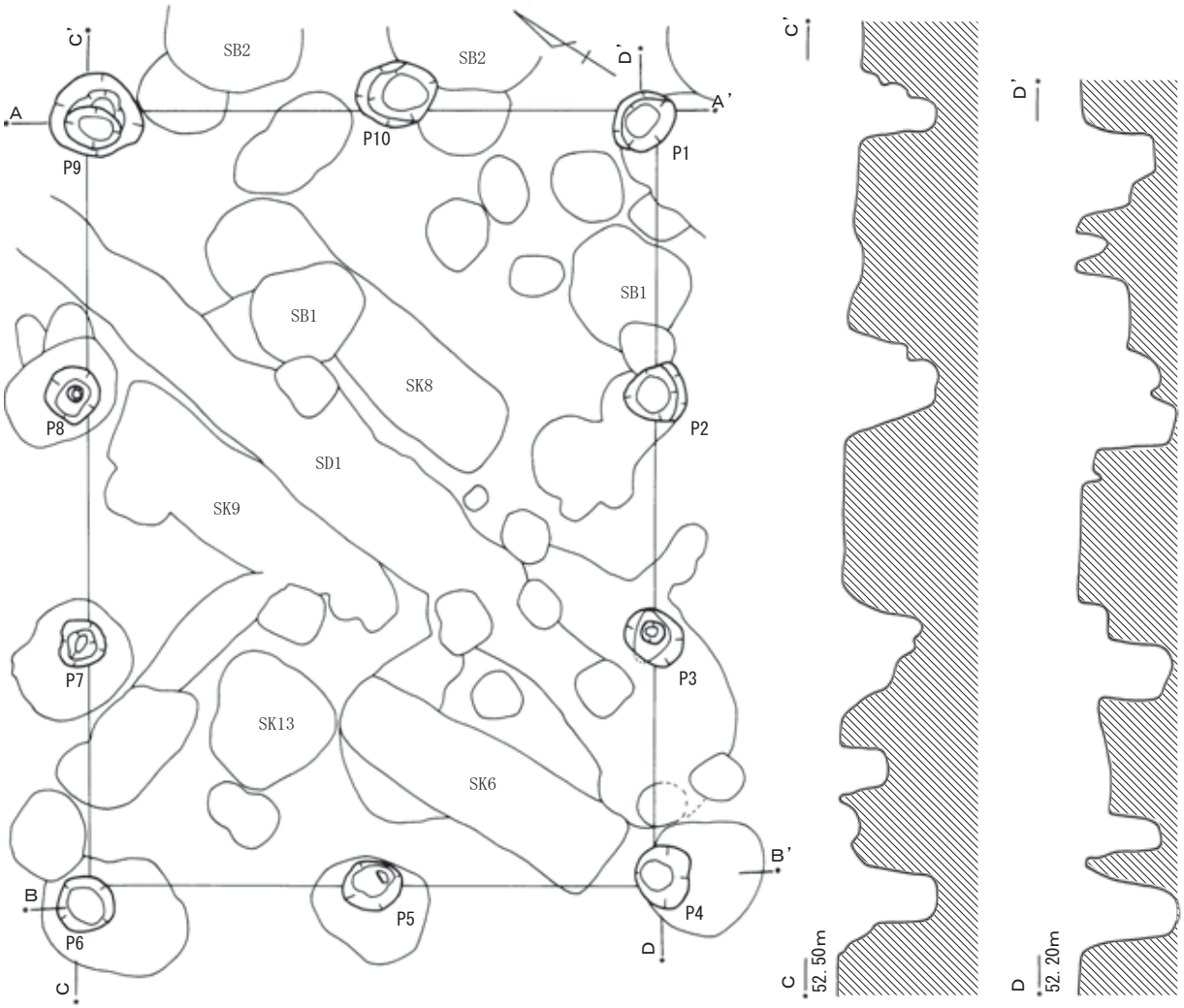
２号掘立柱建物跡　Ａ－Ａ’土層説明

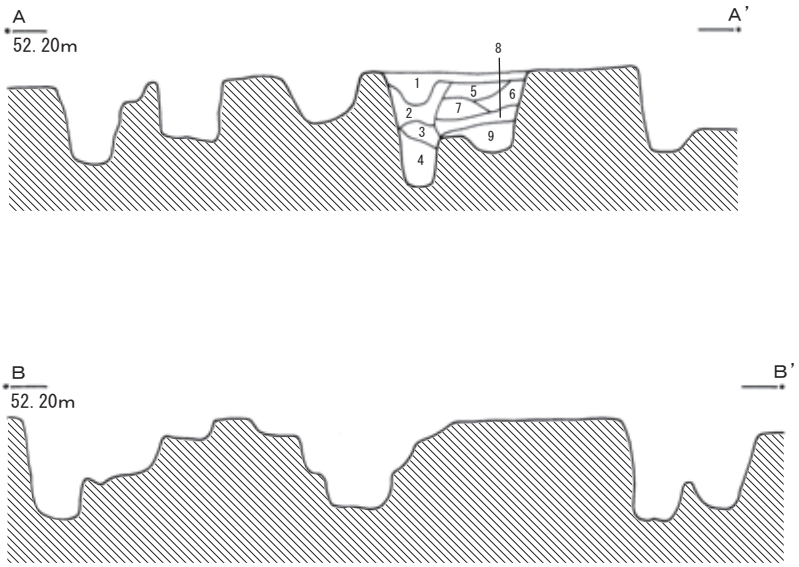
1　暗褐色土　　ローム粒・黒色土粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりあり、粘性弱い。
2　暗茶褐色土　ローム粒・黒色土粒を多量含む。しまり・粘性弱い。
3　黒褐色土　　黒色土と暗褐色土の混合土。ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり。
4　暗黄褐色土　ローム粒を多量、黒色土ブロックを少量含む。しまり・粘性あり。
5　黒褐色土　　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりあり、粘性弱い。
6　暗黄褐色土　黒褐色土をベースにロームブロックを多量含む。しまり・粘性あり。
7　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまりあり、粘性弱い。

２号掘立柱建物跡　Ｂ－Ｂ’土層説明

1　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまりあり、粘性弱い。
2　茶褐色土　　ローム粒を多量含む。しまり・粘性なし。
3　暗褐色土　　ローム粒を少量含む。しまり・粘性なし。
4　茶褐色土　　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまり・粘性なし。
5　暗褐色土　　ローム粒を少量含む。しまり弱い、粘性なし。
6　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまり・粘性弱い。
7　黄褐色土　　ハードブロック主体。しまり・粘性強い。
8　茶褐色土　　ローム粒を多量含む。しまり。粘性なし。
9　茶褐色土　　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまり・粘性なし。
10　黒褐色土　　黒色土主体。ローム粒を少量含む。しまり弱い、粘性なし。
11　茶褐色土　　ローム粒を多量含む。しまり・粘性なし。

第12図　２号掘立柱建物跡実測図





3号掘立柱建物跡土層説明

1	暗褐色土	ローム粒・鉄分・灰色土を少量含む。やや砂質。しまりあり、粘性弱い。
2	暗褐色土	ロームブロックを多量含む。しまり・粘性あり。
3	暗褐色土	ロームブロックを少量含む。しまり・粘性あり。
4	暗黄褐色土	ローム粒を多量含む。しまり・粘性あり。
5	暗茶褐色土	ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりあり、粘性弱い。
6	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック少量。しまり・粘性弱い。
7	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり・粘性弱い。
8	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり・粘性弱い。
9	暗黄褐色土	ローム粒・ロームブロック多量。しまり・粘性あり。

0　2m

第13図　３号掘立柱建物跡実測図

４号掘立柱建物跡

Ｄ２～Ｄ３グリッドにかけて位置する。大半が調査区域外にあるため、規模・主軸方位等は不明である。

確認できたのは、直線的に並ぶ柱跡４基である。４基の距離は6.6mを測り、柱間は2.2mである。

堀り方の平面形態は、不整円形を呈する。規模は、直径70cm ～ 80cm、確認面からの深さ50cm ～ 65cmを測る。

遺物は、出土しなかった。覆土の状況から古代のものと推測される。

５号掘立柱建物跡

Ａ～Ｃ２・３グリッドにかけて位置する。

１号竪穴住居跡・１号掘立柱建物跡・３号掘立柱建物跡などと重複する。

梁行４間、桁行２間以上の総柱建物跡で、床束をもつ構造である。規模は、梁行9.0m、桁行5.1m以上を測り、柱間は2.25mである。主軸方位は、N-82°-Wを示す。

柱の堀り方は不整円形で、直径40cm ～ 87cm、確認面からの深さ35cm ～ 62cmを測る。大半の掘り方の底部から柱の当たり痕が検出された。また、断面観察により、柱が抜き取られずに、建物が廃墟された状況が確認された。

遺物は、出土しなかった。

６号掘立柱建物跡

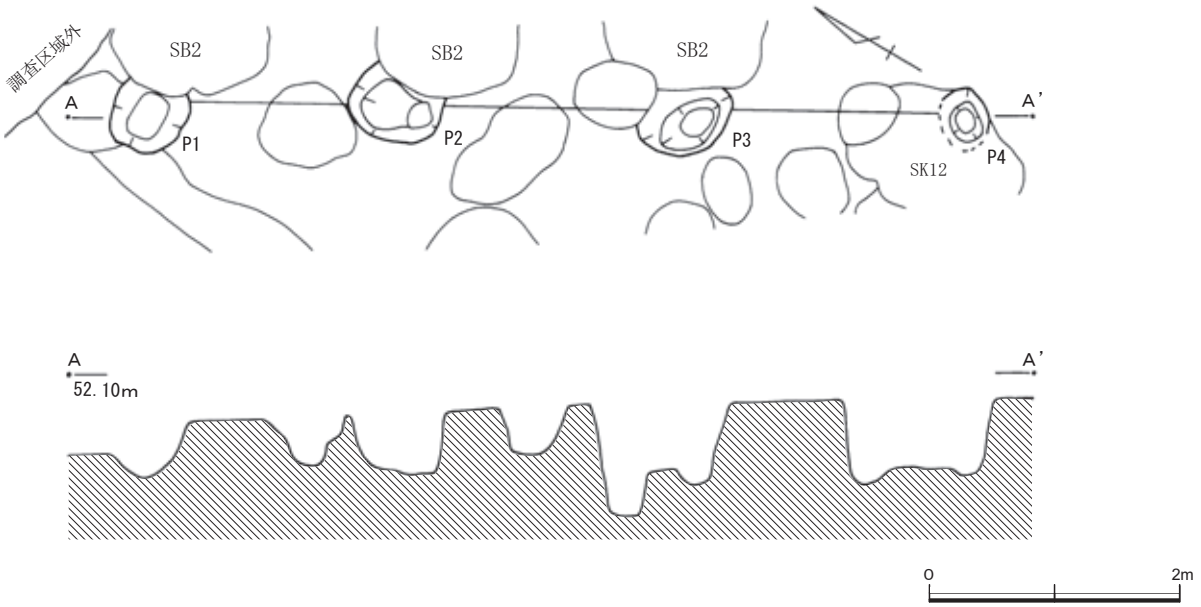
Ｂ１～Ｃ１グリッドにかけて位置する。

確認できたのは、直線的に並ぶ柱４基である。この南側ないし東側には該当する柱跡が検出されなかったので、建物は西側に展開すると推測した。

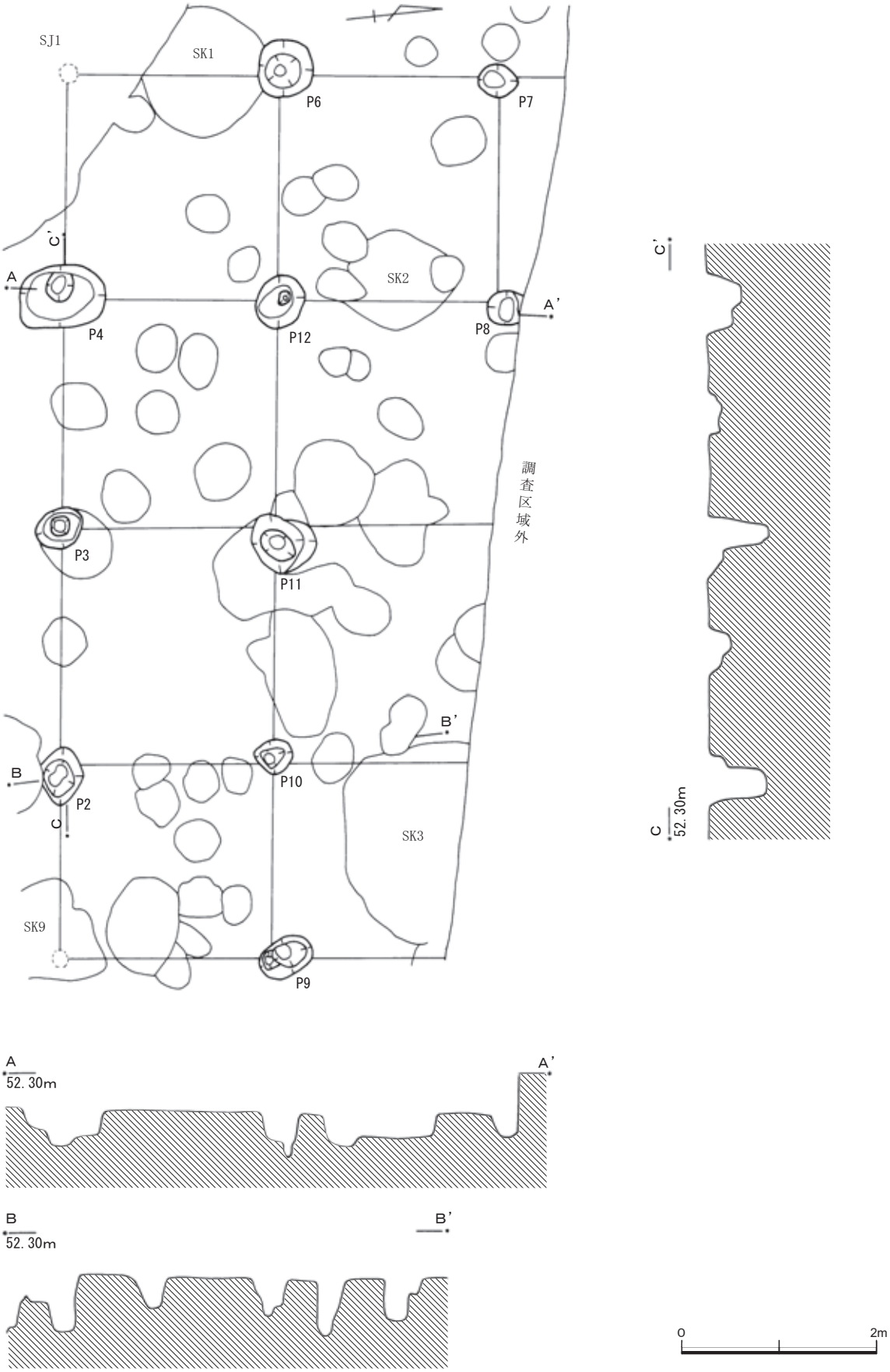
柱跡４基の距離は5.6mを測り、柱間は1.85mである。

堀り方の平面形態は、不整円形を呈する。規模は、直径30cm ～ 44cm、確認面からの深さ45cm ～ 60cmを測る。

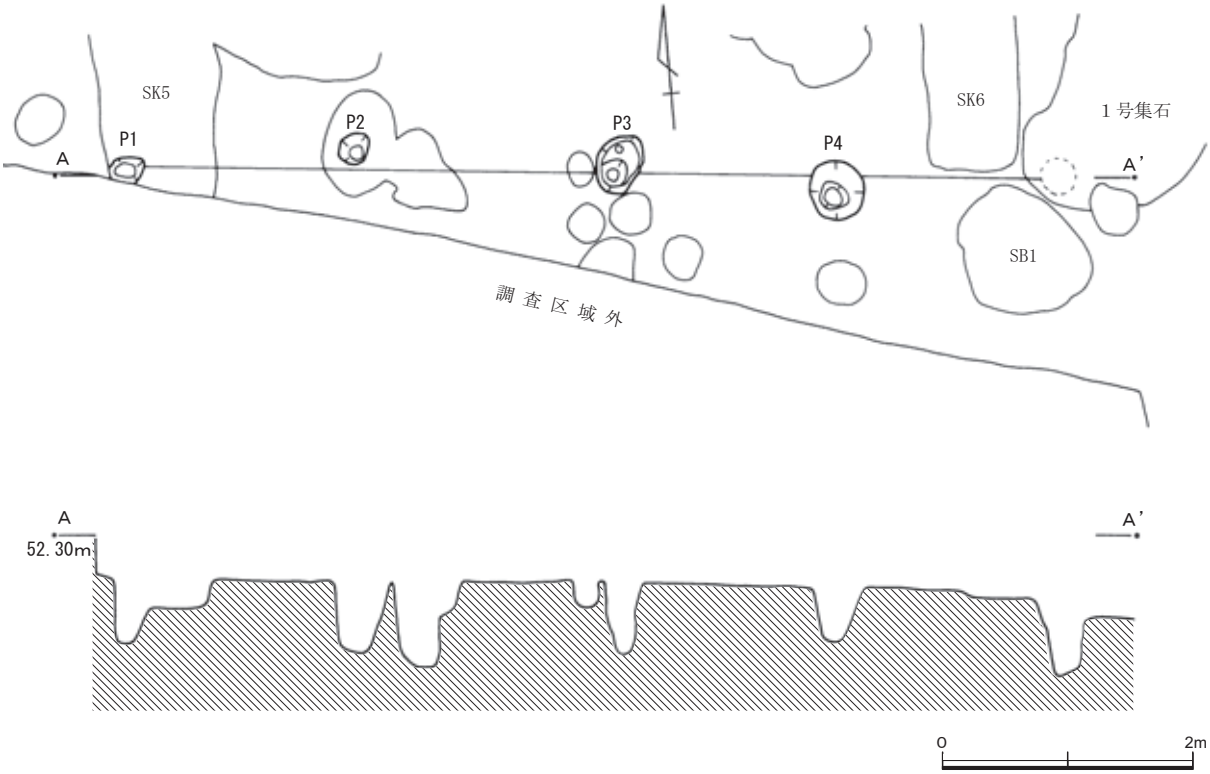
遺物は、出土しなかった。



第14図　４号掘立柱建物跡実測図



第15図　５号掘立柱建物跡実測図



第16図　６号掘立柱建物跡実測図

７号掘立柱建物跡

Ａ１～Ａ２グリッドにかけて位置する。１号竪穴住居跡と重複関係を有する。

確認できたのは柱跡３基であり、建物の北東コーナーと想定した。よって、規模や主軸方位は不明である。

それぞれの柱間は1.8mである。

堀り方の平面形態は、円形を呈する。規模は、直径44cm～49cm、確認面からの深さ20cm～39cmを測る。

遺物は、柱が沈み込むのを支えた根石と思われる石が、南のピット底部から検出された。

１号溝跡

Ｃ１～Ｃ３グリッドにかけて位置する。１号掘立柱建物跡・３号掘立柱建物跡・１号集石遺構と重複する。

北端は調査区域外に延びるため、規模は不明である。確認できた長さは、7.6mである。幅は35～85cm、確認面からの深さは15cm前後を測る。断面は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。

遺物は、出土しなかった。

１号集石遺構

Ｃ１グリッドに位置する。１号掘立柱建物跡・３号掘立柱建物跡・１号溝跡と重複する。

平面形態が不整円形を呈する土坑から礫等が出土した。土坑の直径は110cmを測る。壁は西側で角度をもち、東側で緩やかに掘り込まれる。底面は若干の凹凸を持ち、確認面からの深さは18cmである。

礫は西壁沿いから集中して出土した。ただし、底面からではなく中層ないし上層から検出されたため、ある程度埋没した段階で埋設ないし投棄されたと考えられる。

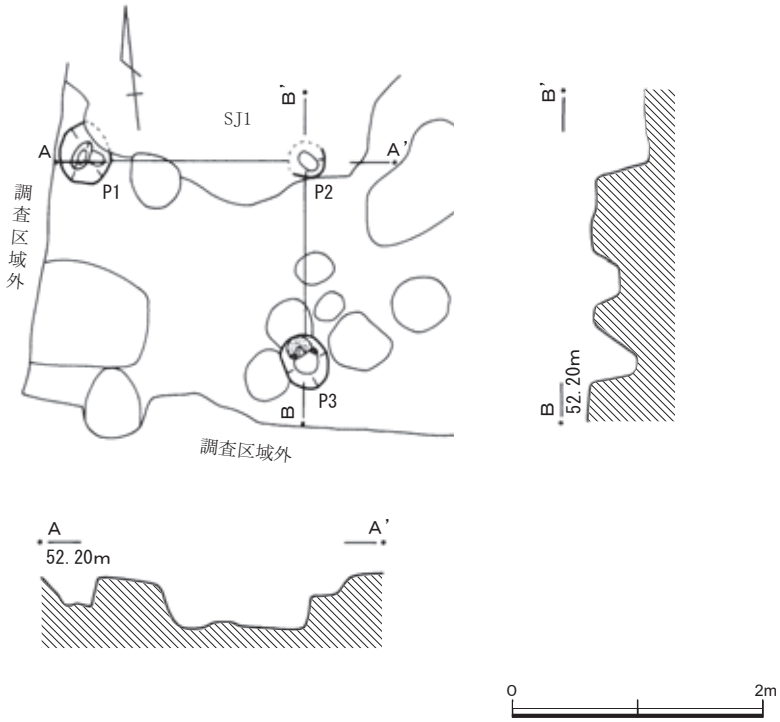
土師器の甕・甑、砥石、磨石が、礫に混じり出土している。

１号土坑

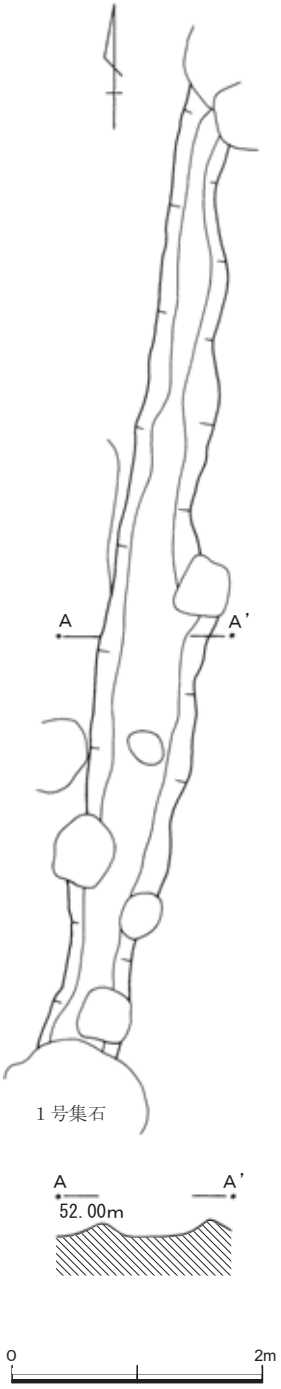
Ａ３グリッドに位置する。５号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は円形を呈し、直径136cmを測る。壁は曲線的に掘り込まれ、底部は丸底である。確認面からの深さは、42cmである。

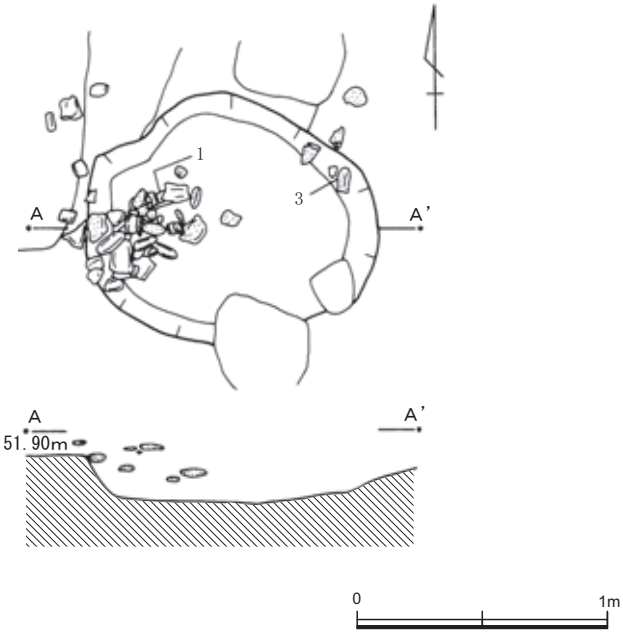
土師器が、覆土中から出土した。



第17図　７号掘立柱建物跡実測図



第18図　１号溝跡実測図



第19図　１号集石遺構実測図

２号土坑

Ｂ３グリッドに位置する。５号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は隅丸正方形を呈し、直径は98cmを測る。壁は角度を持ち掘り込まれ、底面は中央部に向かい深くなる。確認面からの深さは、25cmである。

土師器の甕が、覆土から出土した。

３号土坑

Ｃ３グリッドに位置する。５号掘立柱建物跡と重複する。

北部が調査区域外にあり全容は不明であるが、平面形態は長方形を呈すると想定される。長軸172cm、短軸135cm以上を測る。壁は角度をもち掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、51cmである。

須恵器甕と鉄滓が、覆土から出土した。

４号土坑

Ｂ１～Ｂ２グリッドに位置する。５号土坑と重複する。

平面形態は長方形を呈し、長軸171cm、短軸114cmを測る。壁は角度をもち掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、15cmと浅い。

土師器坏、陶磁器坏、陶器椀が５号土坑との覆土から出土した。

５号土坑

Ｂ１グリッドに位置する。北部が４号土坑と重複し、南部が調査区域外にある。

平面形態は隅丸長方形を呈すると想定され、長軸160cm以上、短軸98cmを測る。壁は角度をもち掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、22cmである。

出土遺物は、４号土坑に記したとおりである。

６号土坑

Ｃ１～Ｃ２グリッドに位置する。１号掘立柱建物跡・３号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は長方形を呈し、長軸248cm、短軸75cmを測る。南壁は緩やかに、北壁は角度をもち掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、33cmである。

遺物は、出土しなかった。

７号土坑

Ｃ１グリッドに位置する。

平面形態は隅丸方形を呈し、直径110cmを測る。壁は角度をもち掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、38cmである。

遺物は、出土しなかった。

８号土坑

Ｃ２～Ｄ２グリッドに位置する。１号掘立柱建物跡・３号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸260cm、短軸90cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、底面は凹凸をもつ。確認面からの深さは、38cmである。

鉄滓が、覆土から出土した。

９号土坑

Ｃ２グリッドに位置する。１・３・５号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は不整長方形を呈し、長軸230cm、短軸72cmを測る。壁は角度をもち掘り込まれ、底面は南壁に向かい若干深くなる。確認面からの深さは、22cmと浅い。

土師器坏・皿、須恵器坏が、覆土から出土した。

10号土坑

Ｄ２グリッドに位置する。南部が調査区域外に延びる。

平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸300cm以上、短軸89cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、底面は凹凸をもつ。確認面からの深さは、20cmである。

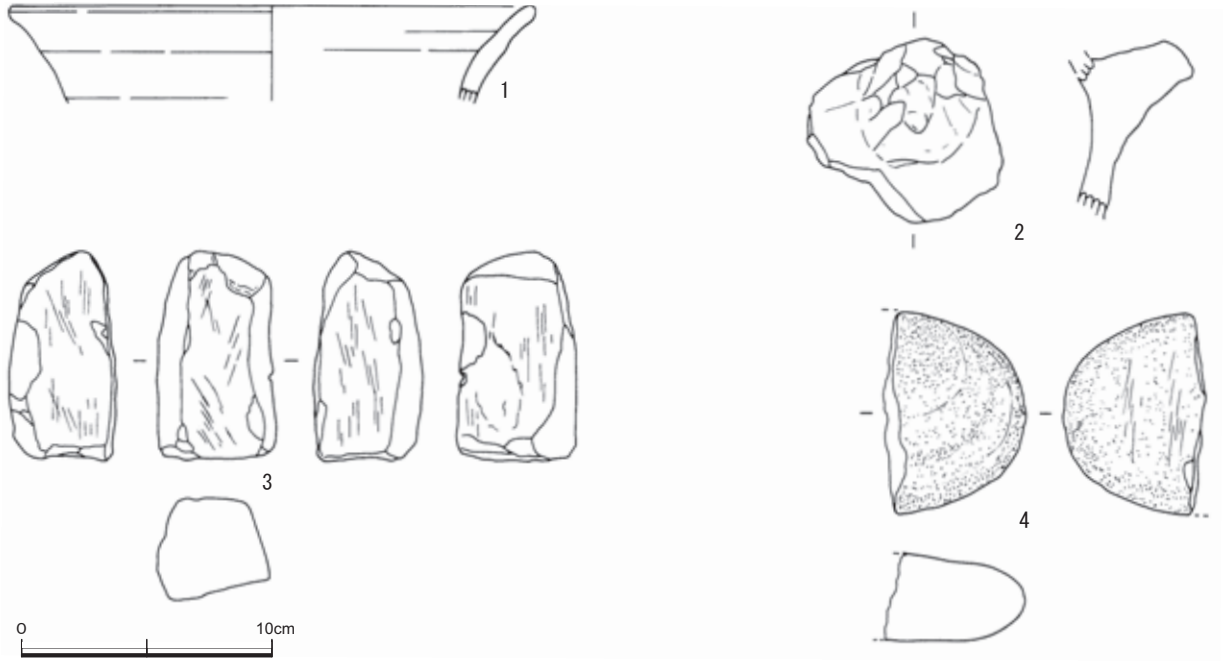
土師器の坏・皿、須恵器の坏・盤が、覆土から出土した。

11号土坑

Ｄ３グリッドに位置する。北部が調査区域外に延びる。

平面形態は長方形を呈すると想定されるが、規模は不明である。壁は角度をもち掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、９cmと浅い。

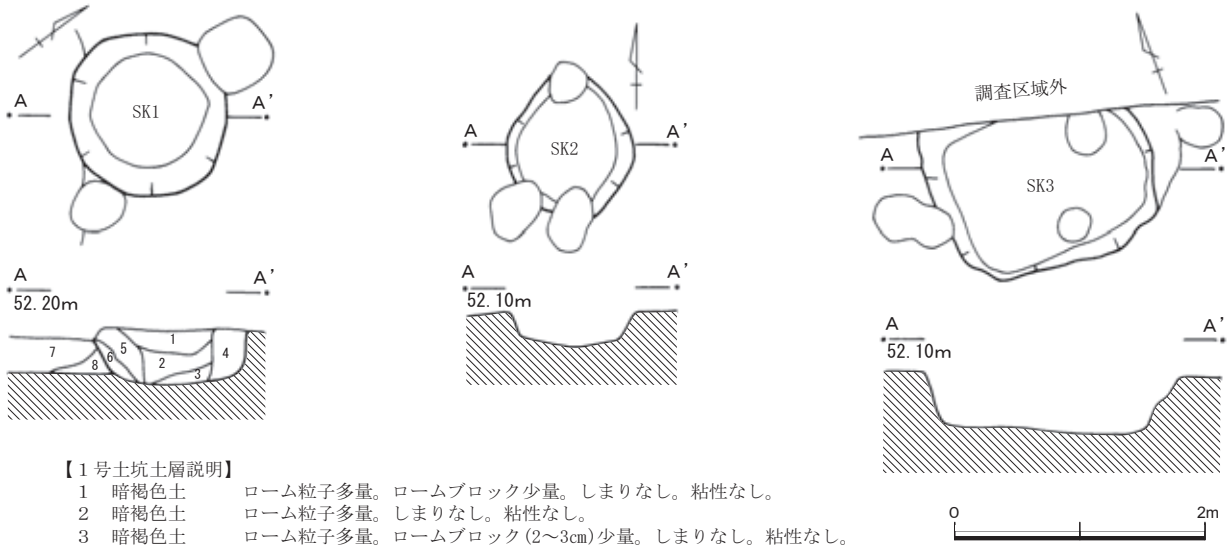
遺物は、出土しなかった。



第20図　１号集石出土遺物実測図

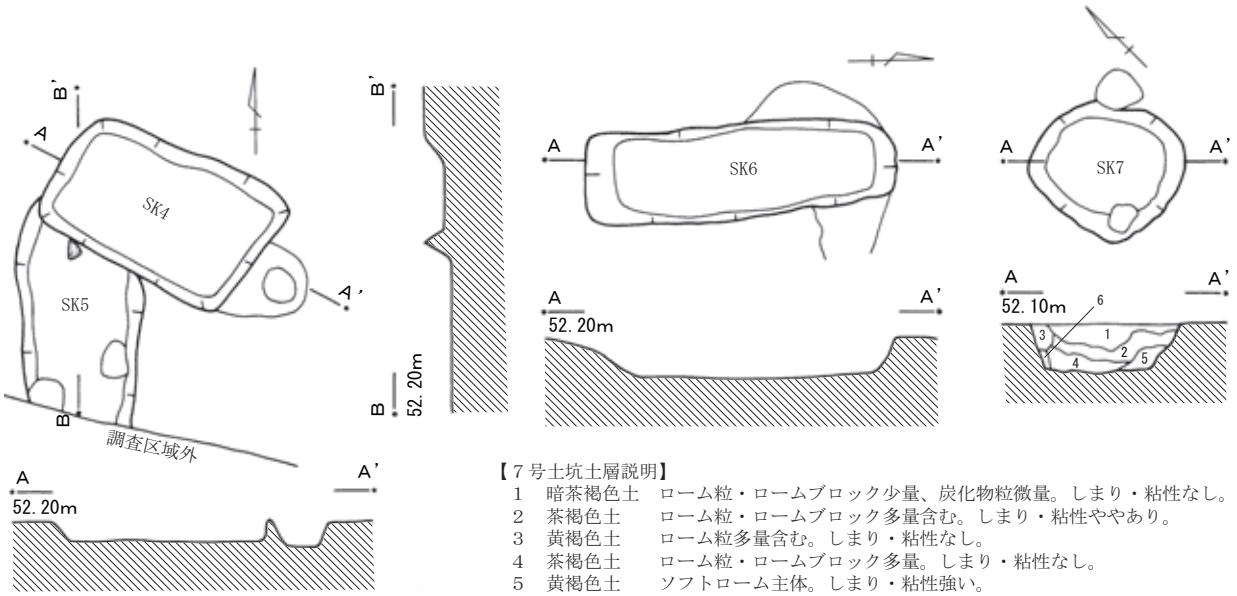
１号集石出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	甕	(20.5)	《3.8》		灰橙褐色	普通	石英、チャート、角閃石、砂粒	図示15%	
2	甑				にぶい橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、砂粒	破片	
3	砥石	長さ8.2	幅4.7	厚さ4.3	重さ241g		石質・凝灰岩		
4	磨石	長さ8.0	幅5.7	厚さ3.5	重さ183.8g		石質・安山岩		

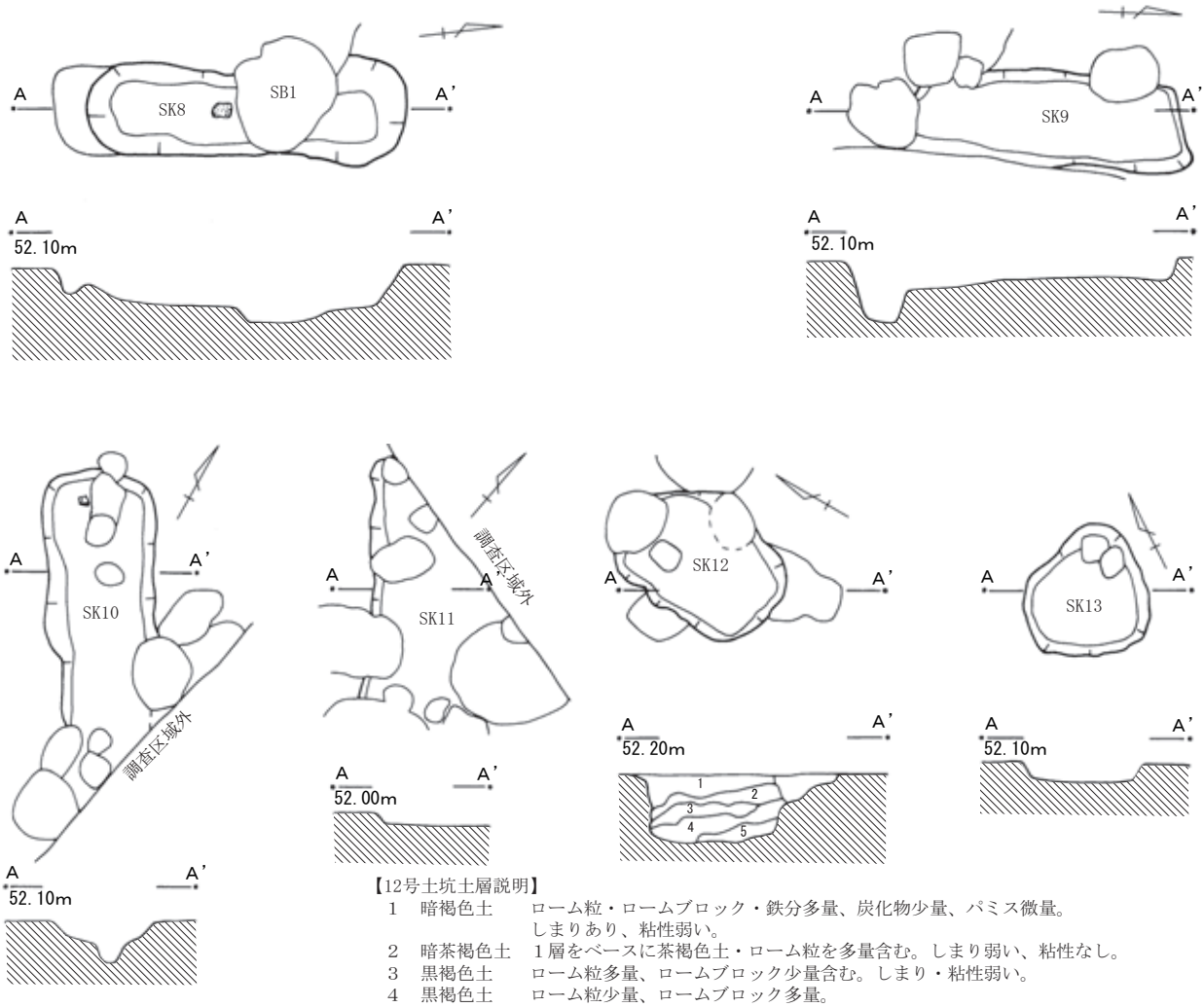


【１号土坑土層説明】
1　暗褐色土　　ローム粒子多量。ロームブロック少量。しまりなし。粘性なし。
2　暗褐色土　　ローム粒子多量。しまりなし。粘性なし。
3　暗褐色土　　ローム粒子多量。ロームブロック(2～3cm)少量。しまりなし。粘性なし。
4　暗茶褐色土　ローム粒子多量。ロームブロック(2～3cm)小量。しまりなし。粘性なし。
5　茶褐色土　　ローム粒子、ロームブロック多量。炭化物粒子微量。しまりなし。粘性なし。
6　暗茶褐色土　ローム粒子微量。しまりなし。粘性なし。
7　暗茶褐色土　ローム粒子微量。しまりなし。粘性なし。
8　茶褐色土　　ローム粒子、ロームブロック小量。ややしまりあり。粘性なし。

第21図　１～３号土坑実測図



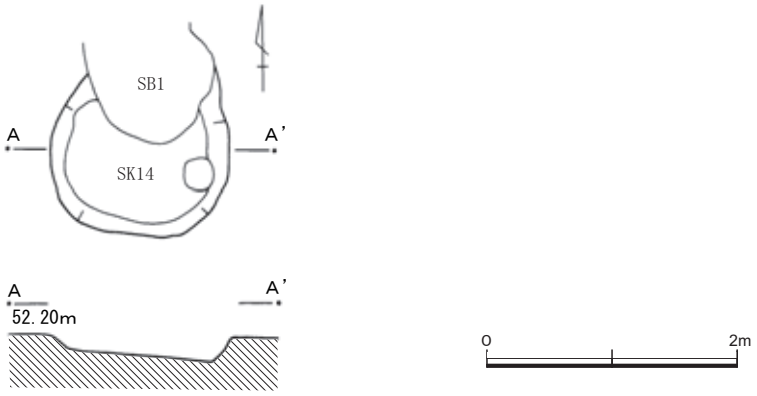
【７号土坑土層説明】
1　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック少量、炭化物粒微量。しまり・粘性なし。
2　茶褐色土　　ローム粒・ロームブロック多量含む。しまり・粘性ややあり。
3　黄褐色土　　ローム粒多量含む。しまり・粘性なし。
4　茶褐色土　　ローム粒・ロームブロック多量。しまり・粘性なし。
5　黄褐色土　　ソフトローム主体。しまり・粘性強い。



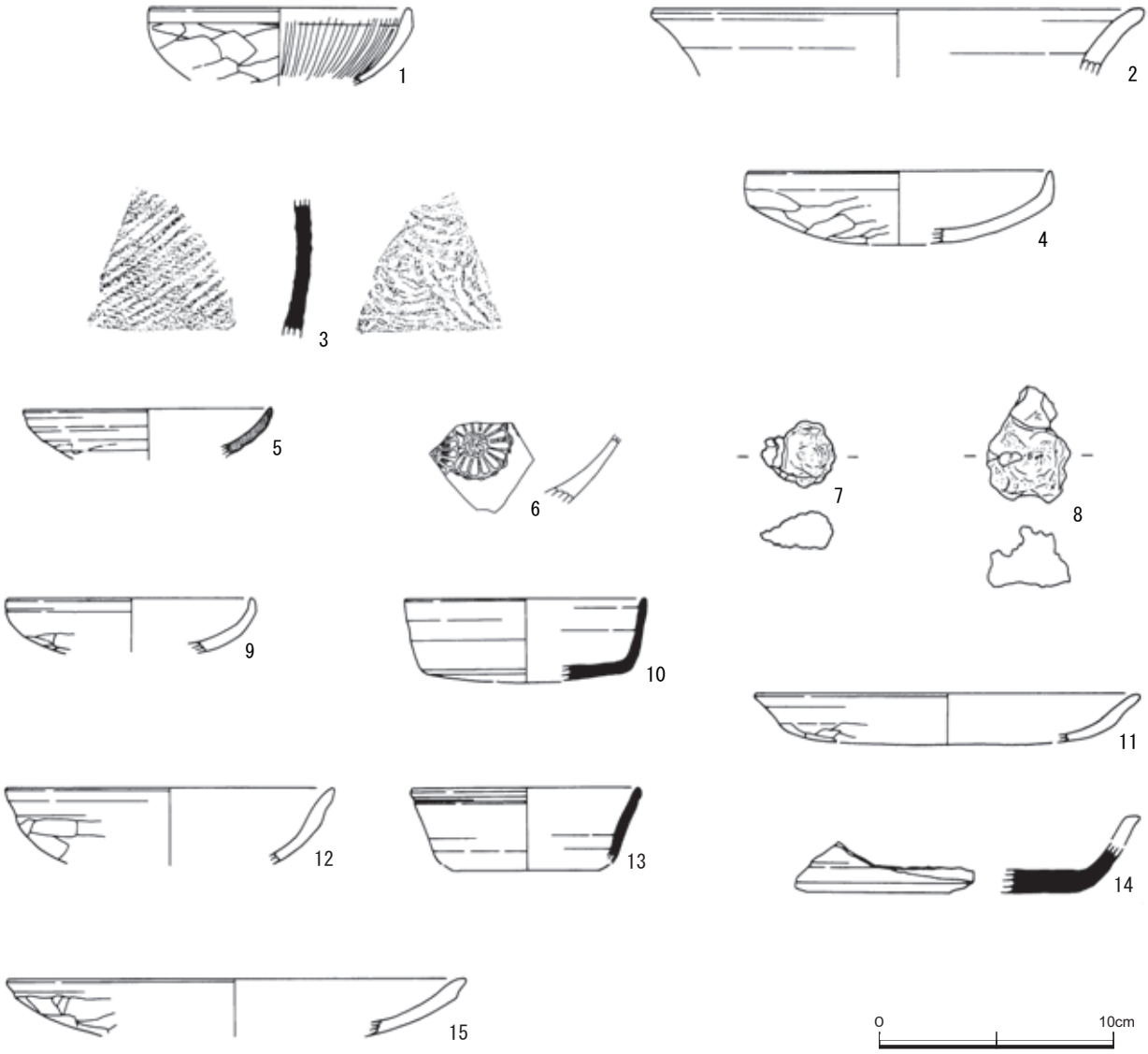
【12号土坑土層説明】
1　暗褐色土　　ローム粒・ロームブロック・鉄分多量、炭化物少量、パミス微量。
　　しまりあり、粘性弱い。
2　暗茶褐色土　１層をベースに茶褐色土・ローム粒を多量含む。しまり弱い、粘性なし。
3　黒褐色土　　ローム粒多量、ロームブロック少量含む。しまり・粘性弱い。
4　黒褐色土　　ローム粒少量、ロームブロック多量。
5　黄褐色土　　ロームブロック多量。しまりあり、粘性強い。

0　2m

第22図　４～13号土坑実測図



第23図　14号土坑実測図



第24図　土坑出土遺物実測図

土坑出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(11.0)	《3.2》		橙色	普通	石英、角閃石、赤色粒	図示60%	ＳＫ１覆土、内面放射状暗文
2	甕	(20.7)	《2.8》		明橙色	普通	石英、角閃石、長石、微砂粒	図示15%	ＳＫ２覆土
3	須恵甕				灰色	良好	石英、長石	破片	ＳＫ３覆土、内面青海波叩き、外面縄叩き、末野産
4	坏	(12.8)	(3.1)		明橙褐色	普通	石英、角閃石	図示20%	ＳＫ４・５覆土
5	坏	(10.4)	《2.1》		暗茶褐色	良好	精良	図示10%	ＳＫ４・５覆土、鉄釉、瀬戸・美濃系
6	菊花紋埦				灰白色	良好・堅緻	緻密、淡灰白色	破片	ＳＫ４・５覆土
7	鉄滓	長さ3.1	幅2.7	厚さ1.5	重さ16.2g	磁着度＝強			ＳＫ３覆土、銑鉄？、亀裂あり
8	鉄滓	長さ5.0	幅3.5	厚さ2.5	重さ47.2g	磁着度＝弱			ＳＫ８覆土、内外面発泡、外面錆付着
9	坏	(10.3)	《2.3》		灰橙色	普通	石英、長石、雲母	図示15%	ＳＫ９覆土
10	須恵坏	(10.1)	(3.5)	(9.0)	明灰色	普通	石英、長石	図示20%	ＳＫ９覆土、全面回転篦ケズリ、末野産
11	皿	(16.2)	(2.1)		明橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス	図示10%	ＳＫ９覆土
12	坏	(13.8)	《3.2》		明橙褐色	普通	石英、角閃石、黒色粒	図示15%	ＳＫ10覆土
13	須恵坏	(9.6)	(3.5)		明灰色	普通	石英、長石、チャート、黒色粒	図示20%	ＳＫ10覆土、口縁外面に沈線あり、末野産
14	須恵盤				明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	破片	ＳＫ10覆土、底部回転篦ケズリ、末野産
15	皿	(19.3)	《2.4》		明橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	ＳＫ10覆土

12号土坑

Ｄ２グリッドに位置する。３号掘立柱建物跡・４号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は不整長方形を呈し、長軸135cm、短軸98cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、55cmである。

遺物は、出土しなかった。

13号土坑

Ｃ２グリッドに位置する。

平面形態は不整長方形を呈し、長軸102cm、短軸98cmを測る。壁は角度をもち掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、16cmと浅い。

遺物は、出土しなかった。

14号土坑

Ｂ２～Ｃ２グリッドに位置する。１号掘立柱建物跡・３号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は円形を呈し、直径142cmを測る。壁は角度をもち掘り込まれ、底面は東壁に向かい緩やかに深くなる。確認面からの深さは、20cmである。

遺物は、出土しなかった。

(2)　154次調査

１号住居跡

１号住居跡は、調査区の南東隅に位置する。西側には約2.0m離れて第２号住居跡があり、北側約3.6mには第１号掘立柱建物跡がある。

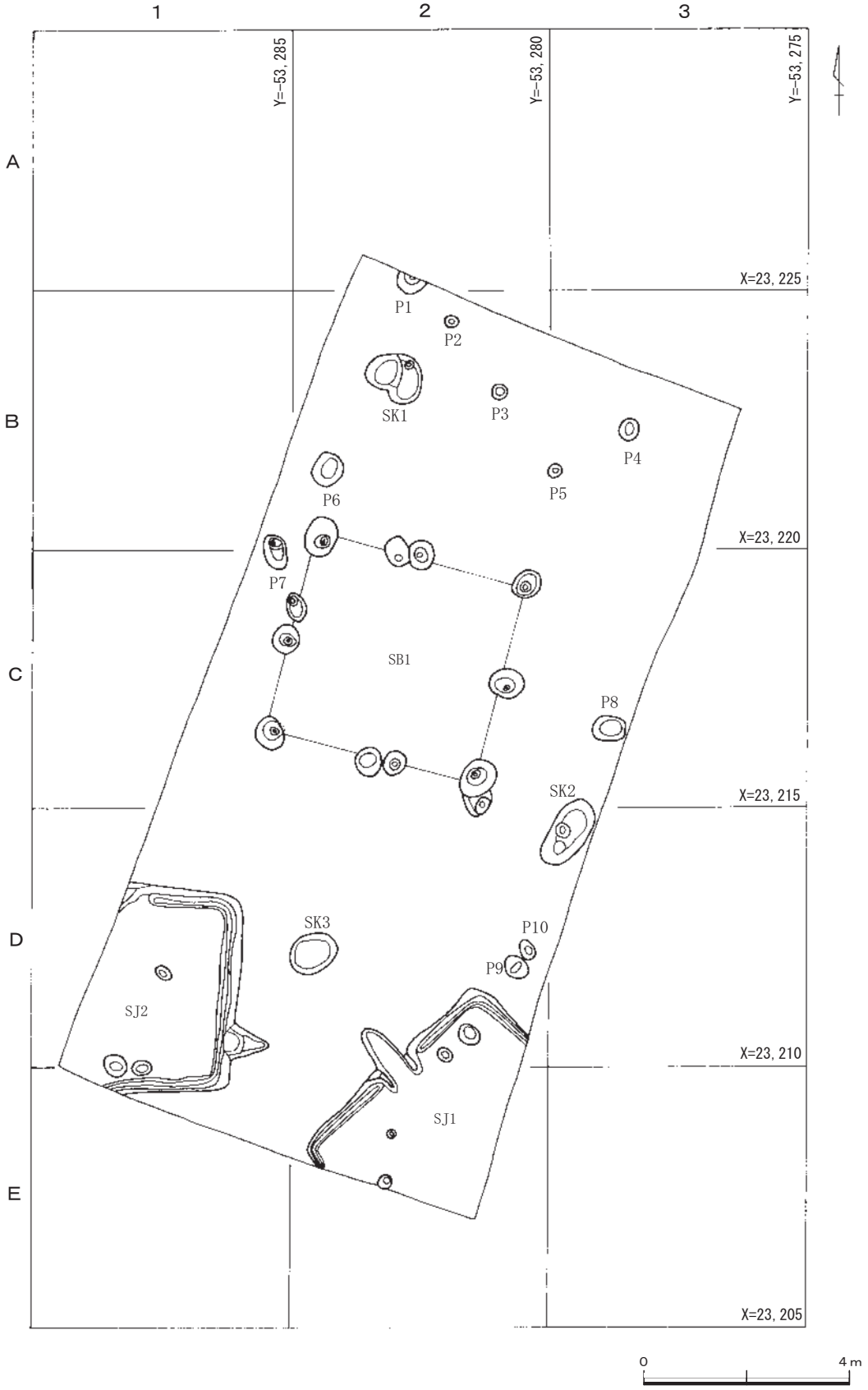
平面形態及び規模は住居の南側半分が調査区外のため全容は不明であるが、平面形は推定長方形、規模は残存する北西面の幅約4.7mを測り、確認面からの深さは約0.45mを測る。主軸方位はN-45°-Wを示す。

床面は概ね平坦で、全体的によくしまっていた。壁溝は検出した西壁部分のカマド両脇から延び廻る。規模は幅約20cm、深さ約５cmを測る。

カマドは西壁のほぼ中央に設置されていた。袖は粘土の造り付けで、少量の礫と土師器甕が補強材として使われていた。焚き口の幅は40cm、燃焼部の幅は38cm、煙道部までの長さ130cmを測る。底面は焚き口から煙道部に向かい緩やかに立ち上がる。

柱穴は明確でないが、ピットは４基検出した。形態は円形及び楕円形で、直径20cm～42cm、深さ９cm～50cmを測る。Ｐ１は深さが約50cmで最も深い。

出土遺物は土師器坏・皿・甕、須恵器坏・蓋・鉢・甕が、カマド及び覆土から出土した。



第25図　熊野遺跡154次調査全測図

１は畿内産土師器の坏である。器形は丸底で口縁部の内彎は弱く、やや直線的にのびる。焼成は良好で、内面に螺旋暗文と放射状暗文が施文され、外面は箆ミガキが施される。口径は11.2㎝で、径高指数は30.4となる。２～11は北武蔵型坏で10、11は口縁部が内屈せず直立ぎみに立ち上がる。12～14有段口縁坏である。15～17は皿で15は内面に放射状暗文を施し、外面は箆ミガキされる。18～20は須恵器坏で18は南比企産である。21は蓋、22は鉢と思われる。須恵器坏、蓋は混入の可能性がある。23～36は土師器甕で、23～25は小型甕、26～29は長胴甕、30～36は胴張甕である。37、38は須恵器甕の胴部の破片で外面に平行叩き後ナデ、内面に青海波叩きを施す。末野産。

住居の時期は、畿内産土師器を含む遺物の年代から７世紀後半頃と考えられる。

２号住居跡

２号住居跡は、調査区の南西隅に位置する。東側約2.0mに離れて第１号住居跡がある。

平面形態及び規模は、住居の西側が調査区外のため全容は不明であるが、平面形は推定隅丸長方形、南北の幅は約4.1m、確認面からの深さは約0.45mを測る。主軸方位はN-90°-Eを示す。

床面は若干の凹凸があるが概ね平坦で、よくしまっていた。壁溝は調査区外の部分を除き略全周する。幅は約20㎝、深さ７㎝を測る。

カマドは東壁のやや南側に設置されていた。燃焼部の幅は50㎝、煙道部の長さは46㎝を測る。燃焼部から台付甕が逆位で出土した。支脚として使われたものと思われる。袖は確認できなかった。また焚き口部の床面下には壁溝が通り、暗渠状になっていた。

柱穴は明確でないが、ピットは３基検出した。平面形は円形、楕円形を呈し、直径22㎝～44㎝、深さ26㎝～31㎝を測る。

出土遺物は土師器坏・鉢・台付甕・甕、須恵器坏・埦・高台埦・蓋・鉢・甕等が、カマド及び覆土から出土した。１～６は土師器坏で、１～４は浅身で平底の暗文坏、５は浅身の北武蔵型坏である。６は深身、丸底形態で他の坏に比べ古いタイプのものである。７～10は須恵器坏で８、９が南比企産、７、10は末野産と思われる。11～13は須恵器埦で口縁部に沈線が廻り、佐波理埦模倣の様相を呈す。14は須恵器高台埦、15～17は埦蓋で口縁端部の折り返しが小さい。18は須恵器鉢で体部に平行叩きを施す。19、20須恵器甕である。21、22、24、25は土師器台付甕、23は土師器鉢で内面に雑な放射状暗文を施す。26～33は土師器甕であるが、28は甑の可能性がある。

住居の時期は出土遺物から８世紀前半～中葉と考えられる。

１号掘立柱建物跡

１号掘立柱建物は、調査区中央部のやや北寄りに位置する。２×２間の側柱建物で、規模は桁行長4.0m、梁行長4.0m（6.6尺）である。主軸方位はN-75°-Wを示す。

柱間は桁行2.0m、梁行2.0mを測る。柱穴の掘り方は円形、楕円形で、径は50㎝～80㎝、深さは43㎝～65㎝である。Ｐ９～11は柱筋を通るが補助的なものか。

出土遺物は各柱穴から少量出土しているが、Ｐ－６とＰ－７が多い。１～３は土師器坏で、１は浅身、平底で内面に放射状暗文と螺旋暗文を施文する。２、３は北武蔵型坏で扁平な丸底器形を呈する。口縁部は内彎ほぼ直立する。４は須恵器坏、５は高台埦、６は蓋、７は甕、須恵器はいずれも末野産である。８、９土師器甕である。

遺構の時期は出土遺物から、８世紀中葉～後半と考えられる。

１号土坑

１号土坑は、調査区の北西部に位置する。

平面形態は不整楕円形を呈し、長軸110㎝、短軸74㎝、確認面からの深さ20㎝を測る。

底面は浅いすり鉢状を呈し、壁際に浅い小ピットがある。

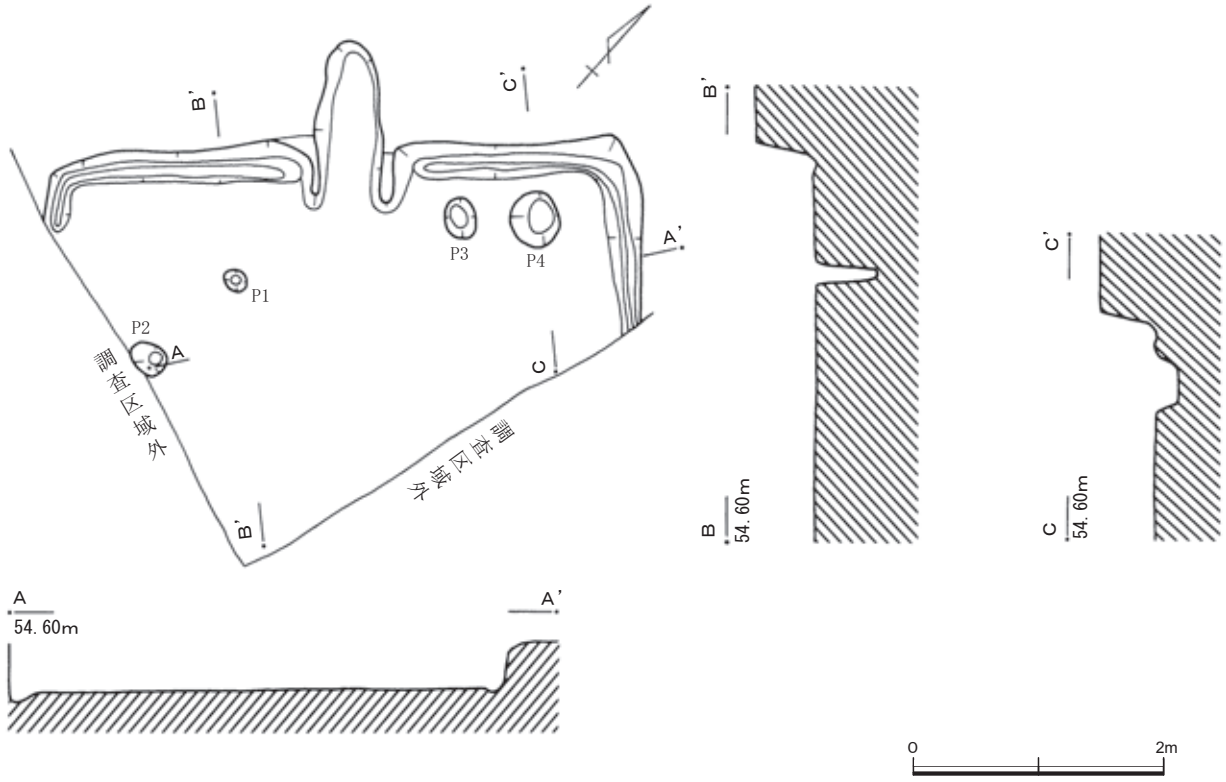
出土遺物はなかった。

２号土坑

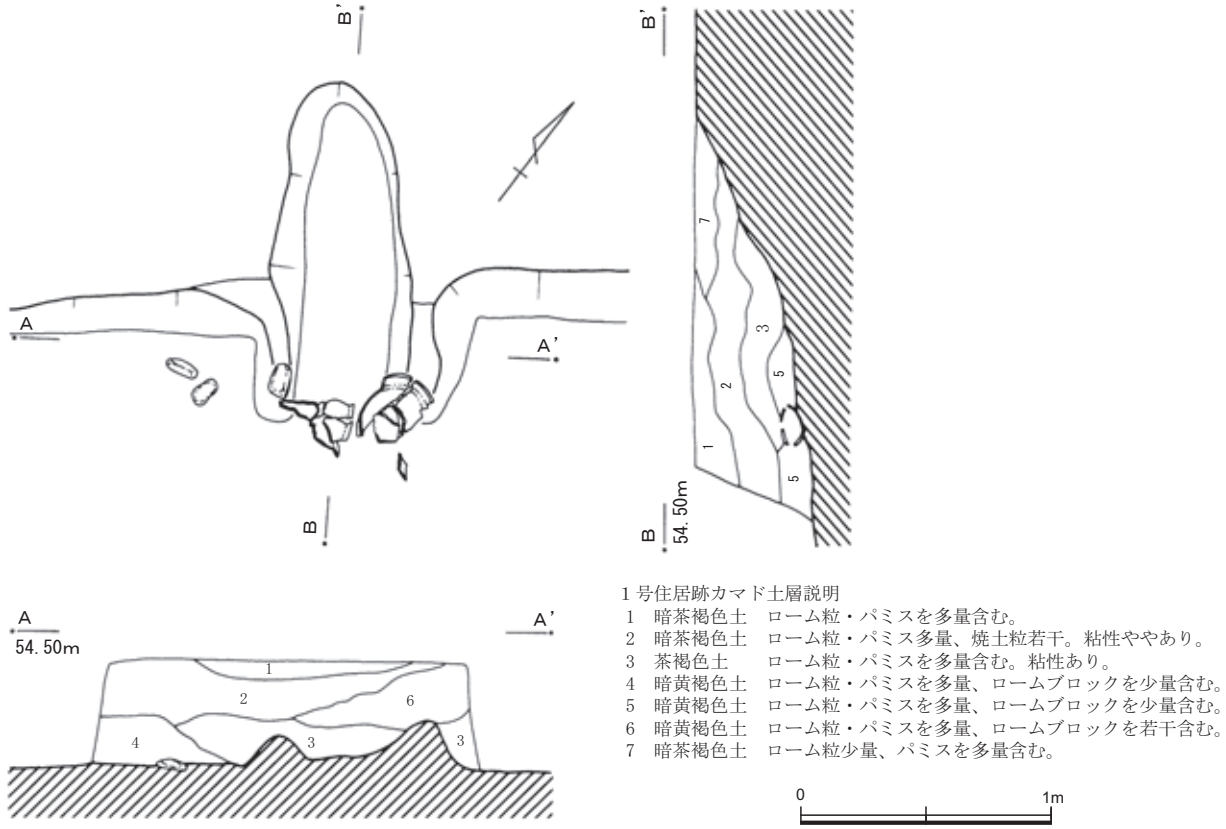
２号土坑は、調査区のほぼ中央部の東端に位置する。

平面形態は長楕円形を呈し、長軸136㎝、短軸75㎝、確認面からの深さ37㎝を測る。主軸方位はN-31°-Eを示す。底面はすり鉢状を呈し、中央部に浅い小ピットがある。

出土遺物はなかった。

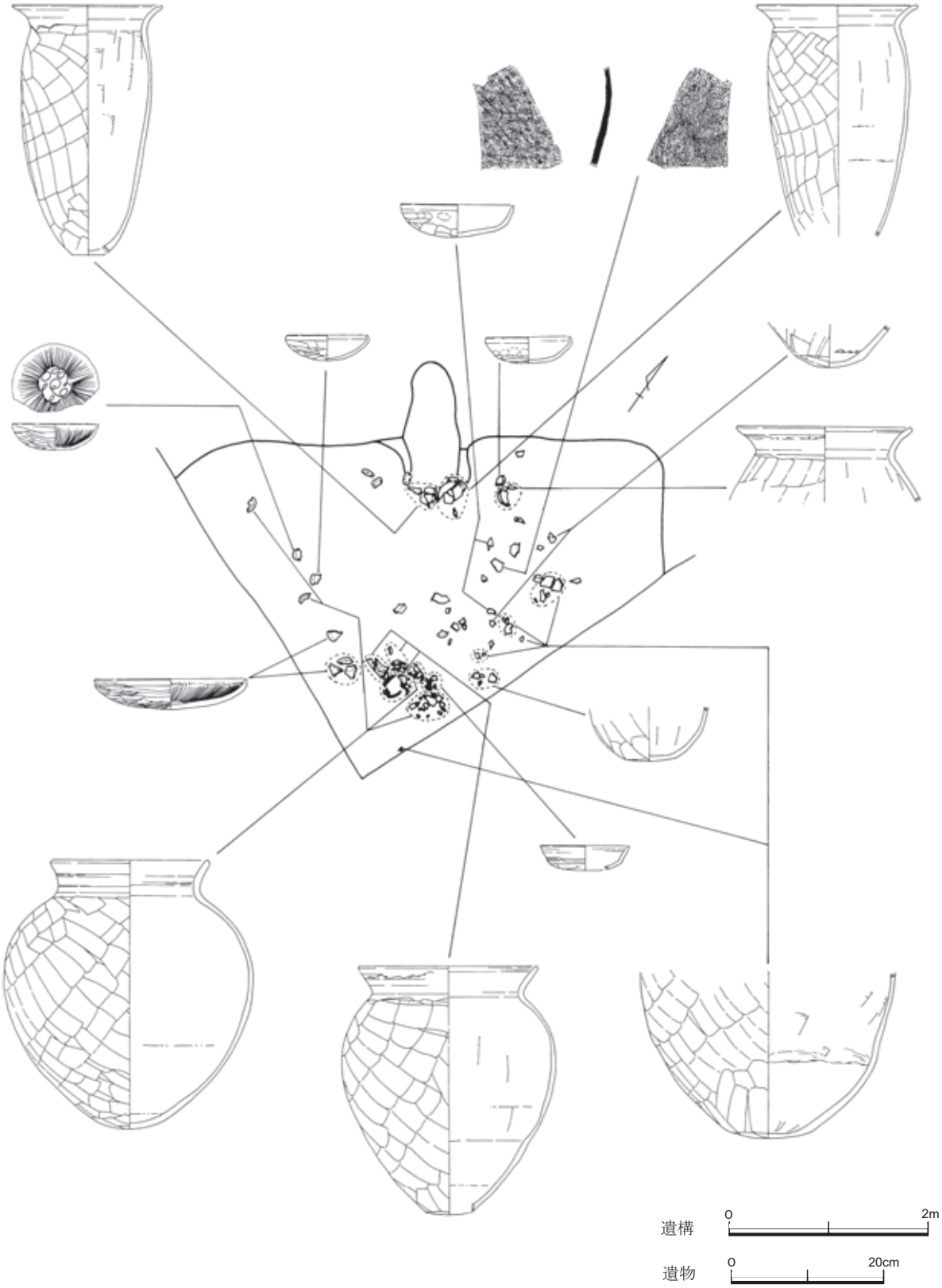


第26図　１号住居跡実測図

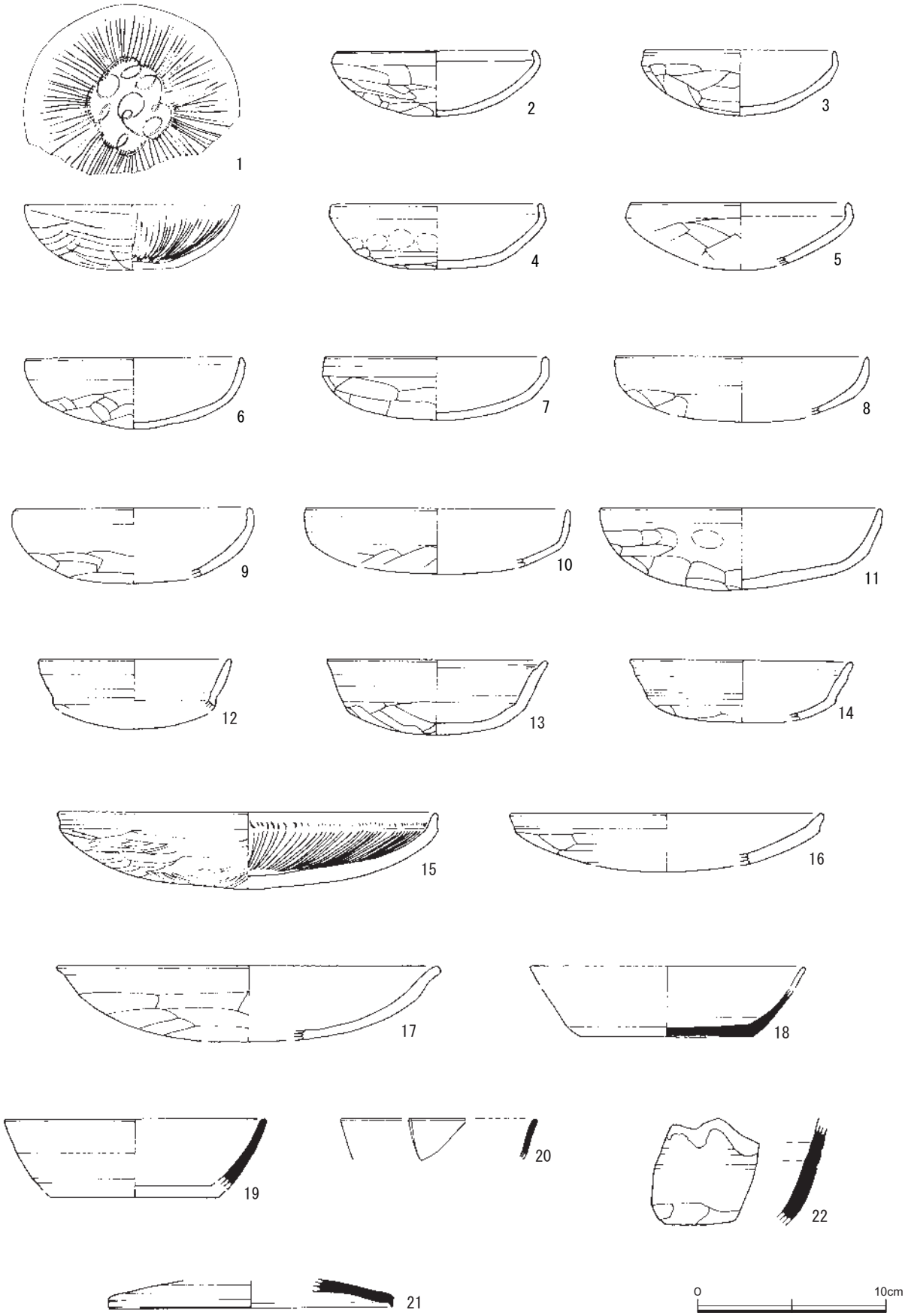


1号住居跡カマド土層説明
1　暗茶褐色土　ローム粒・パミスを多量含む。
2　暗茶褐色土　ローム粒・パミス多量、焼土粒若干。粘性ややあり。
3　茶褐色土　ローム粒・パミスを多量含む。粘性あり。
4　暗黄褐色土　ローム粒・パミスを多量、ロームブロックを少量含む。
5　暗黄褐色土　ローム粒・パミスを多量、ロームブロックを少量含む。
6　暗黄褐色土　ローム粒・パミスを多量、ロームブロックを若干含む。
7　暗茶褐色土　ローム粒少量、パミスを多量含む。

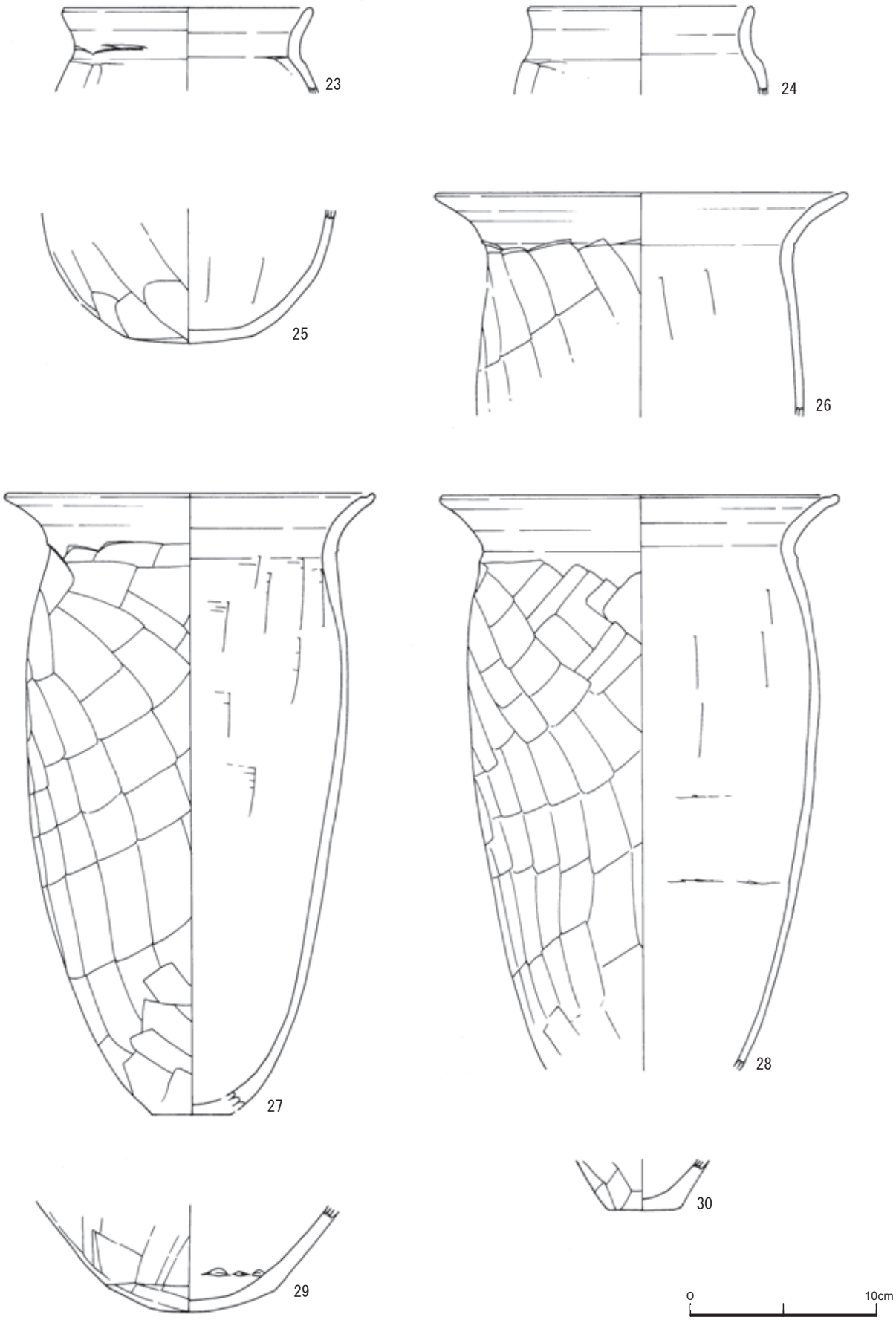
第27図　１号住居跡カマド実測図



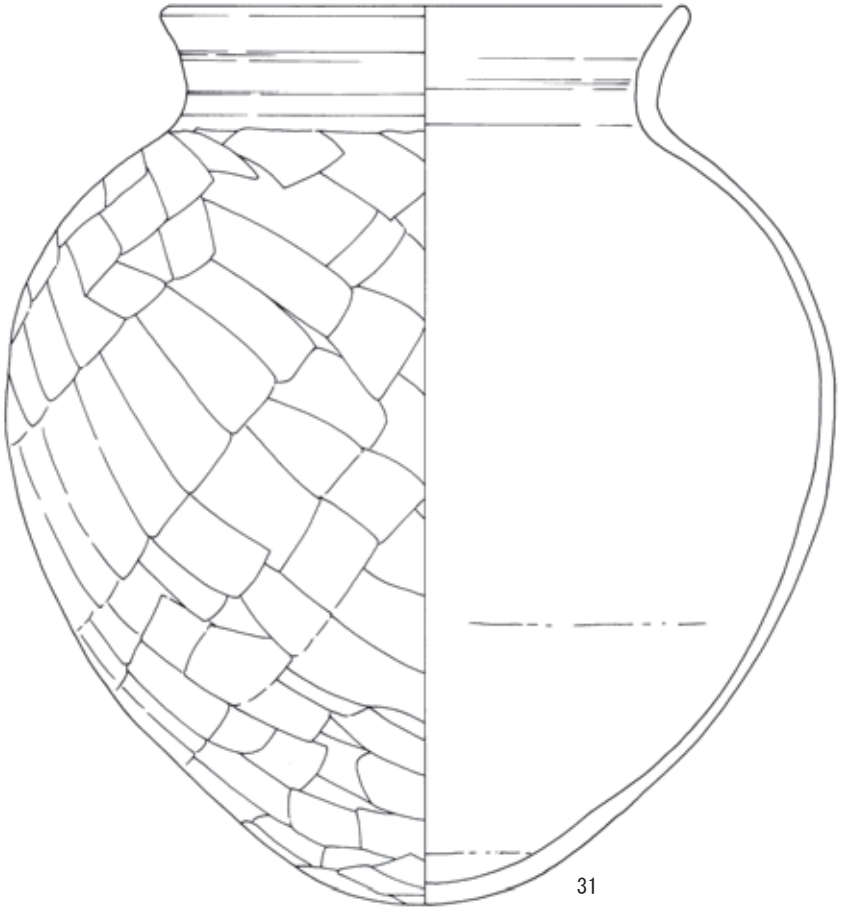
第28図　１号住居跡遺物出土状況図

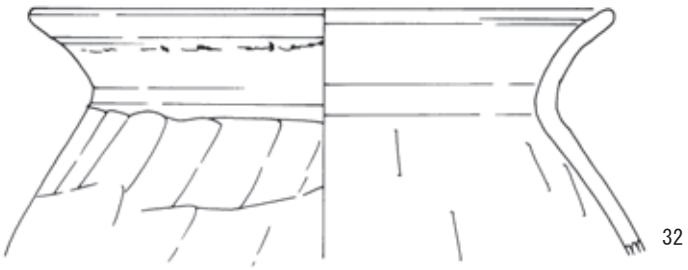


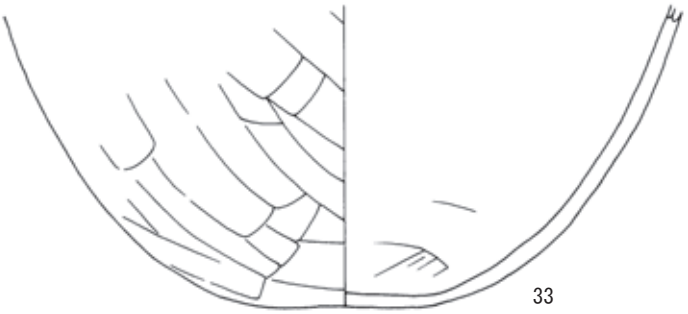
第29図　１号住居跡出土遺物実測図(1)



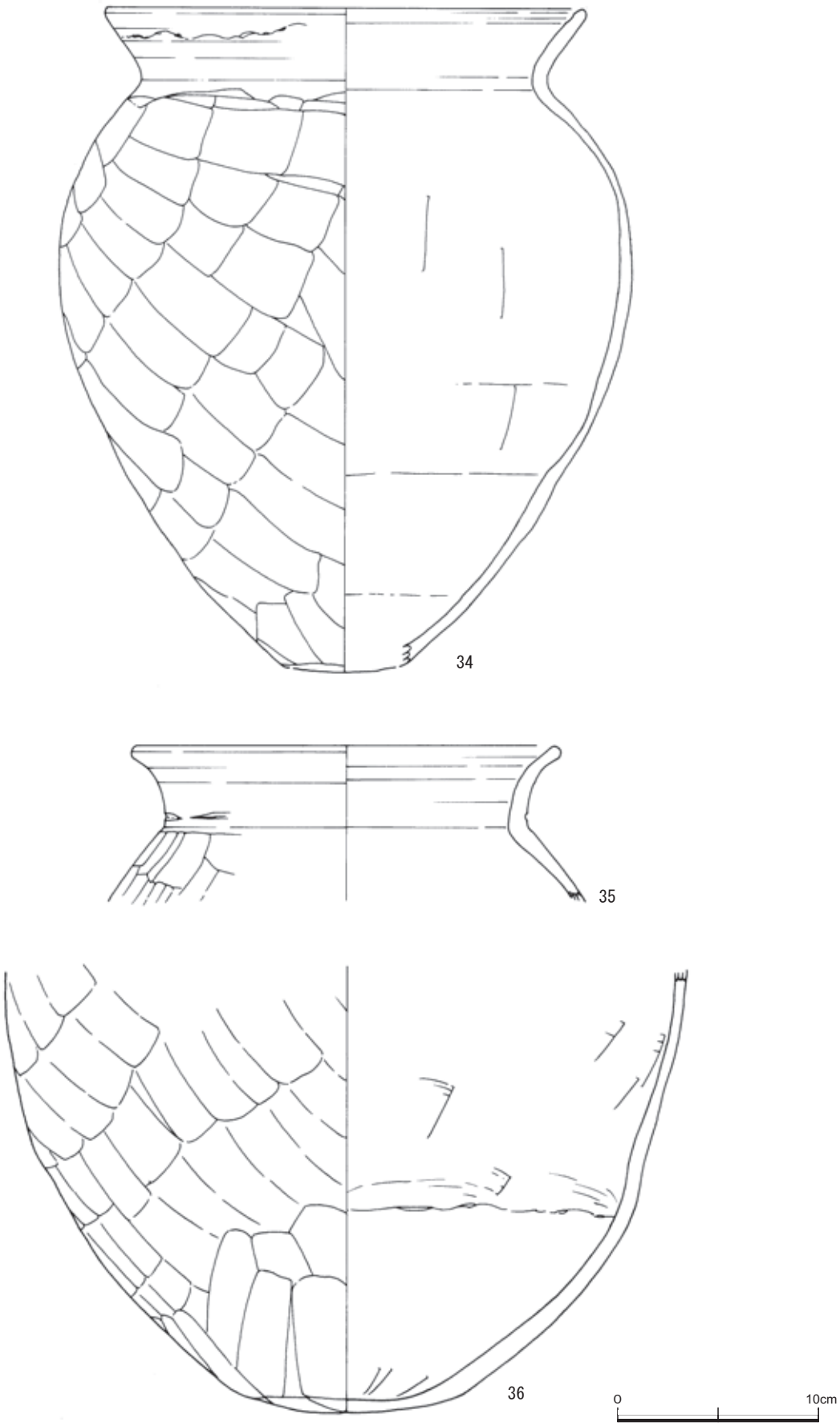
第30図　１号住居跡出土遺物実測図(2)



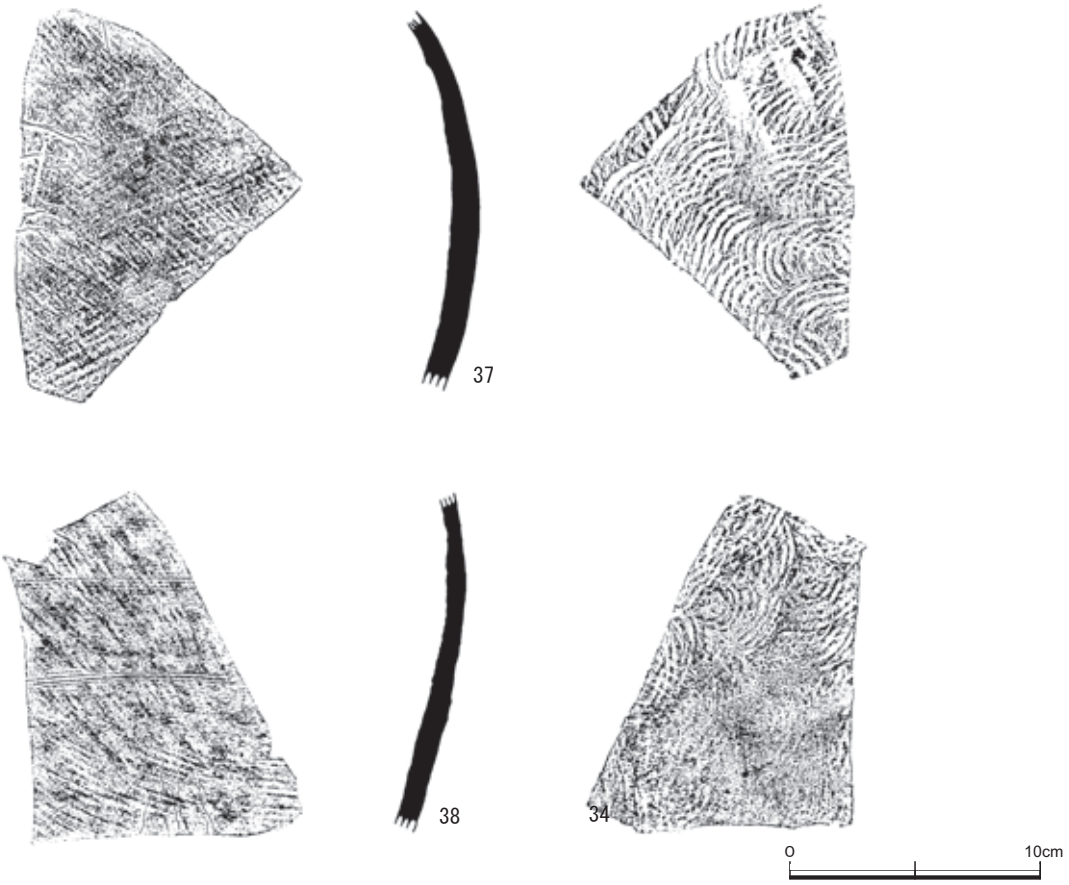




第31図　１号住居跡出土遺物実測図(3)



第32図　１号住居跡出土遺物実測図(4)



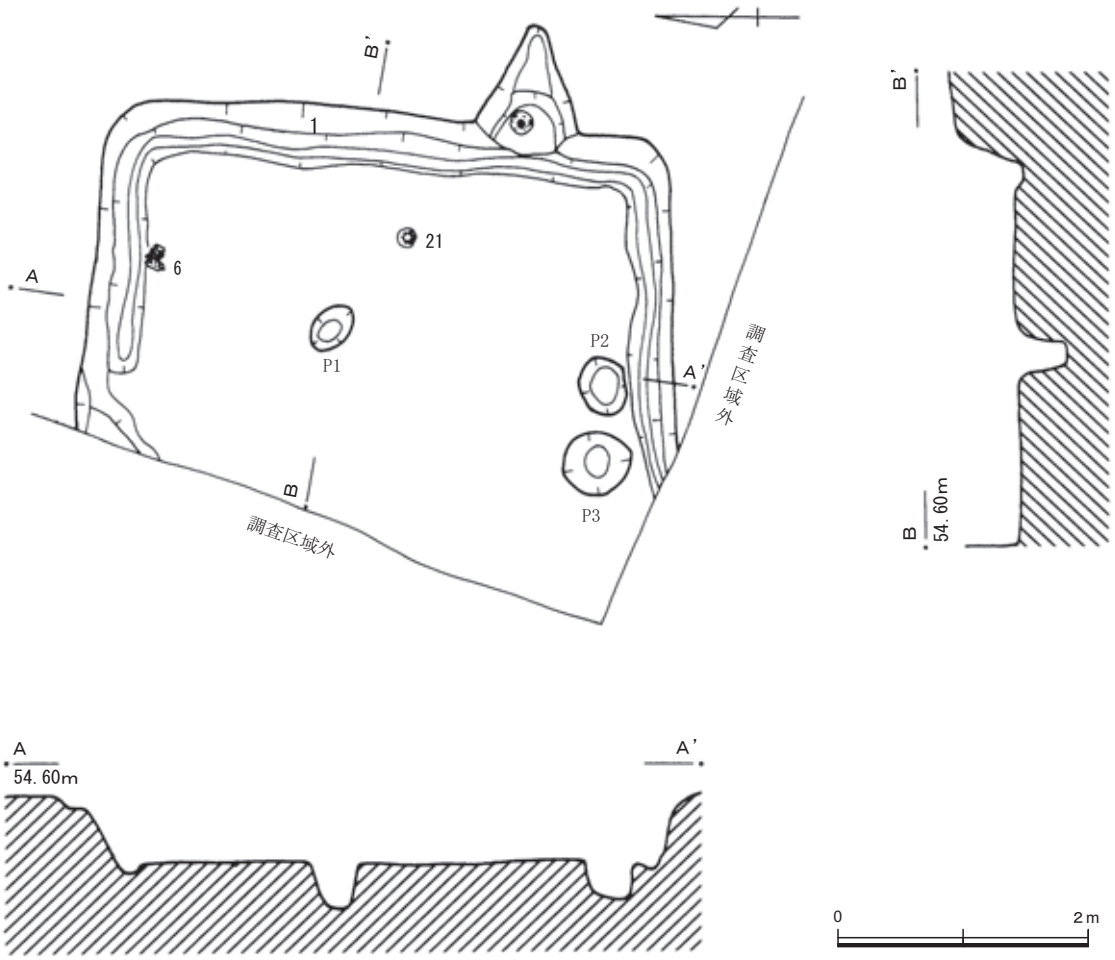
第33図　１号住居跡出土遺物実測図(5)

１号住居跡出土遺物観察表(1)

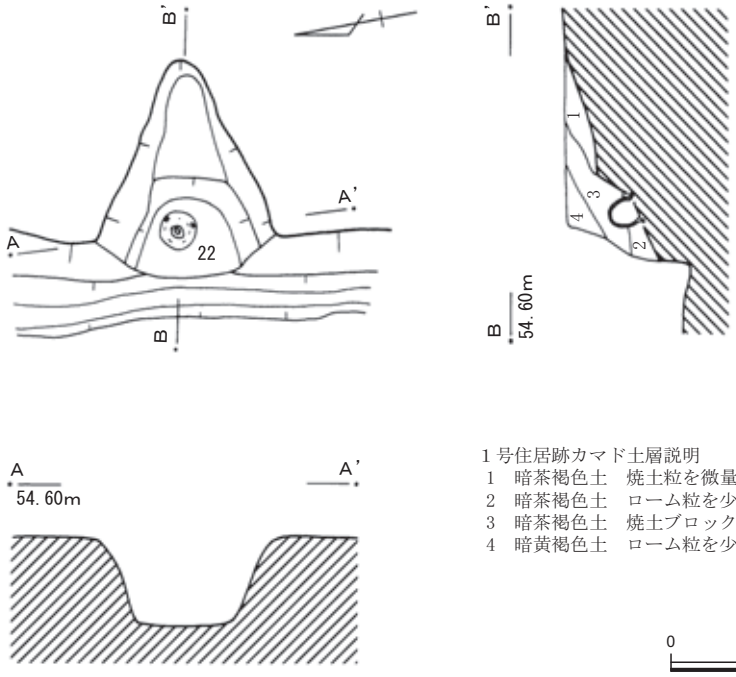
番号	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	11.2	3.4	－	淡褐色	良好	石英、黒色粒、銀雲母、赤色粒	70％	図示、畿内産、内面螺旋＋放射状暗文、外面ナデ後ミガキ
2	坏	10.4	3.4	－	橙茶褐色	普通	石英、角閃石、雲母	95％	図示
3	坏	(9.9)	2.9	－	橙褐色	良好	石英、角閃石（精良）	35％	覆土一括
4	坏	11.0	3.4	－	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	70％	図示、底部焼け斑
5	坏	(11.3)	(3.5)	－	黒褐～橙褐	良好	石英、角閃石、雲母	図示20％	覆土一括
6	坏	10.3	3.7	－	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	75％	覆土一括、底部焼け斑
7	坏	11.5	3.3	－	明茶褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	60％	覆土一括、底部焼け斑
8	坏	(13.2)	(3.4)	－	灰茶褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示10％	覆土一括
9	坏	(12.3)	(4.0)	－	明橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示40％	覆土一括、歪みやや有り
10	坏	(13.8)	(3.4)	－	明茶褐色	良好	石英、角閃石、雲母	図示15％	覆土一括
11	坏	14.6	4.2	－	赤褐色	良好	石英、角閃石、赤色粒	90％	図示
12	坏	(10.0)	《2.7》	－	灰黄褐色	不良	石英、角閃石、微砂粒	図示10％	覆土一括
13	坏	11.4	3.9	－	橙褐色	良好	石英、角閃石、砂粒	75％	覆土一括
14	坏	(11.5)	(3.2)	－	暗赤褐色	普通	雲母、(精良)	図示40％	図示
15	皿	19.7	4.0	－	橙褐～黒褐	良好	石英、角閃石、酸化鉄粒、砂粒	60％	図示、在地産、内面放射状暗文、外面箆ケズリ後ミガキ
16	皿	(16.3)	(3.1)	－	暗褐色	やや悪	石英、微砂粒	図示15％	覆土一括
17	皿	(20.0)	(4.0)	－	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒（粗い）	図示25％	覆土一括
18	須恵坏	－	《2.6》	9.0	明灰色	普通	石英、長石、片岩	図示60％	カマド一括、底部全面回転箆ケズリ、末野産
19	須恵坏	(13.7)	《3.8》	－	明灰色	普通	石英、長石、海綿骨針	図示10％	覆土一括、南比企産
20	須恵坏	(10.2)	《2.2》	－	灰白色	やや悪	石英、微砂粒	図示10％	覆土一括、南比企産？
21	須恵蓋	(14.8)	《1.4》	－	灰色	普通	長石、片岩	図示10％	覆土一括、末野産
22	須恵鉢	－	－	－	灰褐色	不良	石英、片岩、赤色粒、黒色粒	破片	覆土一括、体部に２条の沈線あり、末野産
23	小型甕	(13.0)	《4.5》	－	暗褐色	やや悪	石英、長石、チャート、砂粒	図示15％	覆土一括
24	小型甕	(11.7)	《4.7》	－	橙色	普通	雲母、微砂粒	図示15％	覆土一括、磨滅あり
25	小型甕	－	《7.1》	6.8	橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、砂粒（粗い）	図示65％	図示
26	甕	21.6	《11.9》	－	灰赤褐色	良好	石英、角閃石、砂粒、酸化鉄粒	図示40％	覆土一括

1号住居跡出土遺物観察表(2)

27	甕	19.4	(32.8)	(4.2)	暗橙褐色	普通	石英、チャート、角閃石、パミス	80%	カマド図示
28	甕	20.8	《30.5》	—	橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、酸化鉄粒	図示80%	カマド図示
29	甕	—	《2.7》	(4.0)	黒褐色	普通	石英、パミス、砂粒	図示55%	覆土一括
30	甕	—	《5.8》	—	暗赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示70%	図示、外面に焼け斑
31	甕	20.4	35.2	—	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母	70%	図示、カマド一括
32	甕	22.7	《9.8》	—	橙褐色	普通	石英、角閃石、酸化鉄粒、砂粒	図示80%	図示、カマド一括
33	甕	—	《11.8》	—	橙褐～黒褐	やや悪	石英、角閃石、パミス、砂粒	図示25%	覆土一括、磨滅あり
34	甕	23.3	(32.6)	(6.0)	淡赤褐色	普通	石英、角閃石、チャート、砂粒	図示70%	図示
35	甕	(20.5)	《7.7》	—	灰橙褐色	良好	石英、雲母、微砂粒、赤色粒	図示20%	覆土一括
36	甕	—	《21.6》	—	明橙褐色	普通	石英、角閃石、赤色粒、砂粒	図示80%	図示
37	甕	—	—	—	明灰色	普通	石英、長石	破片	覆土一括、外面平行叩き後ナデ、内面青海波叩き、末野産
38	甕	—	—	—	明灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	図示、外面平行叩き後回転ナデ、内面青海波、末野産

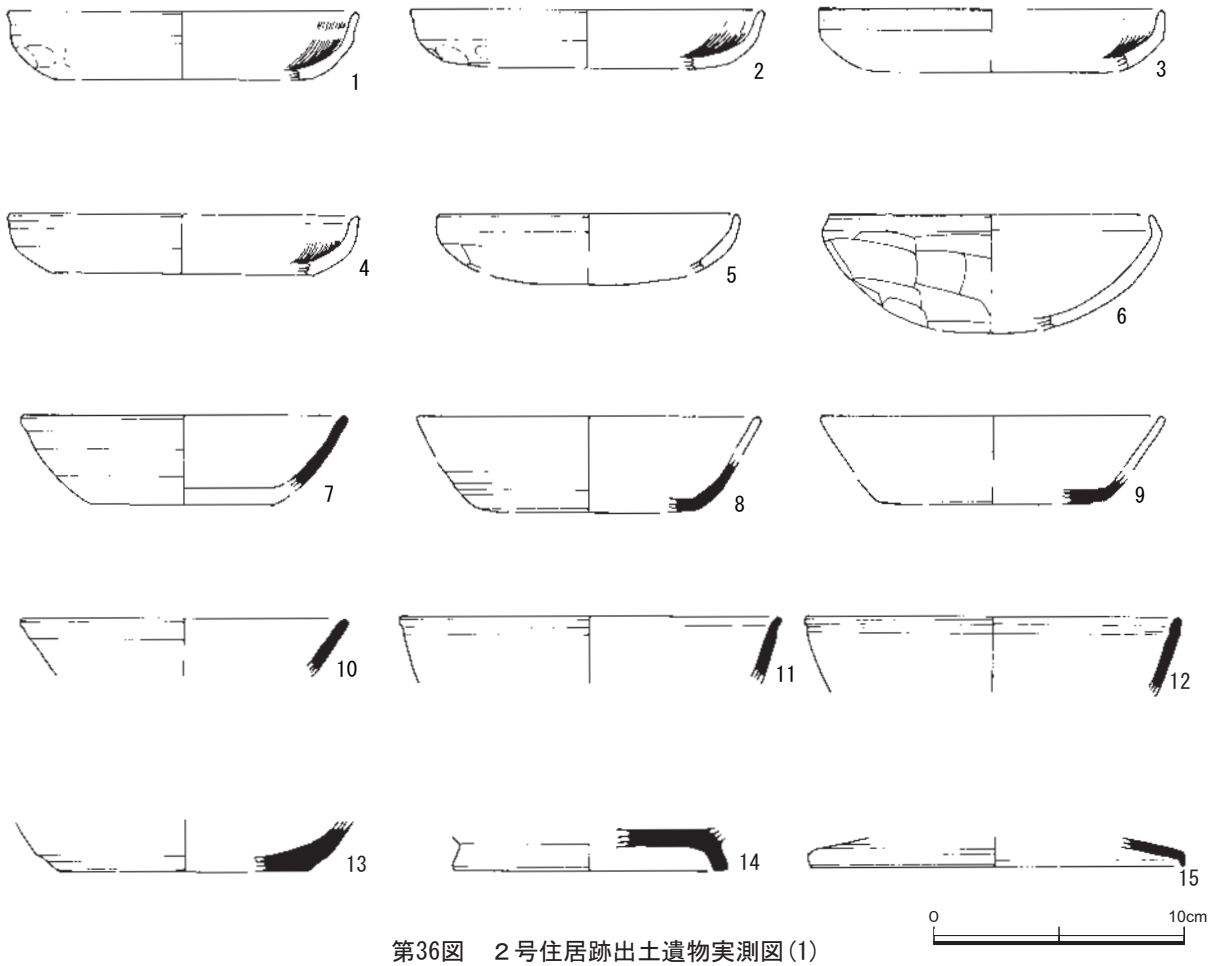


第34図　２号住居跡実測図

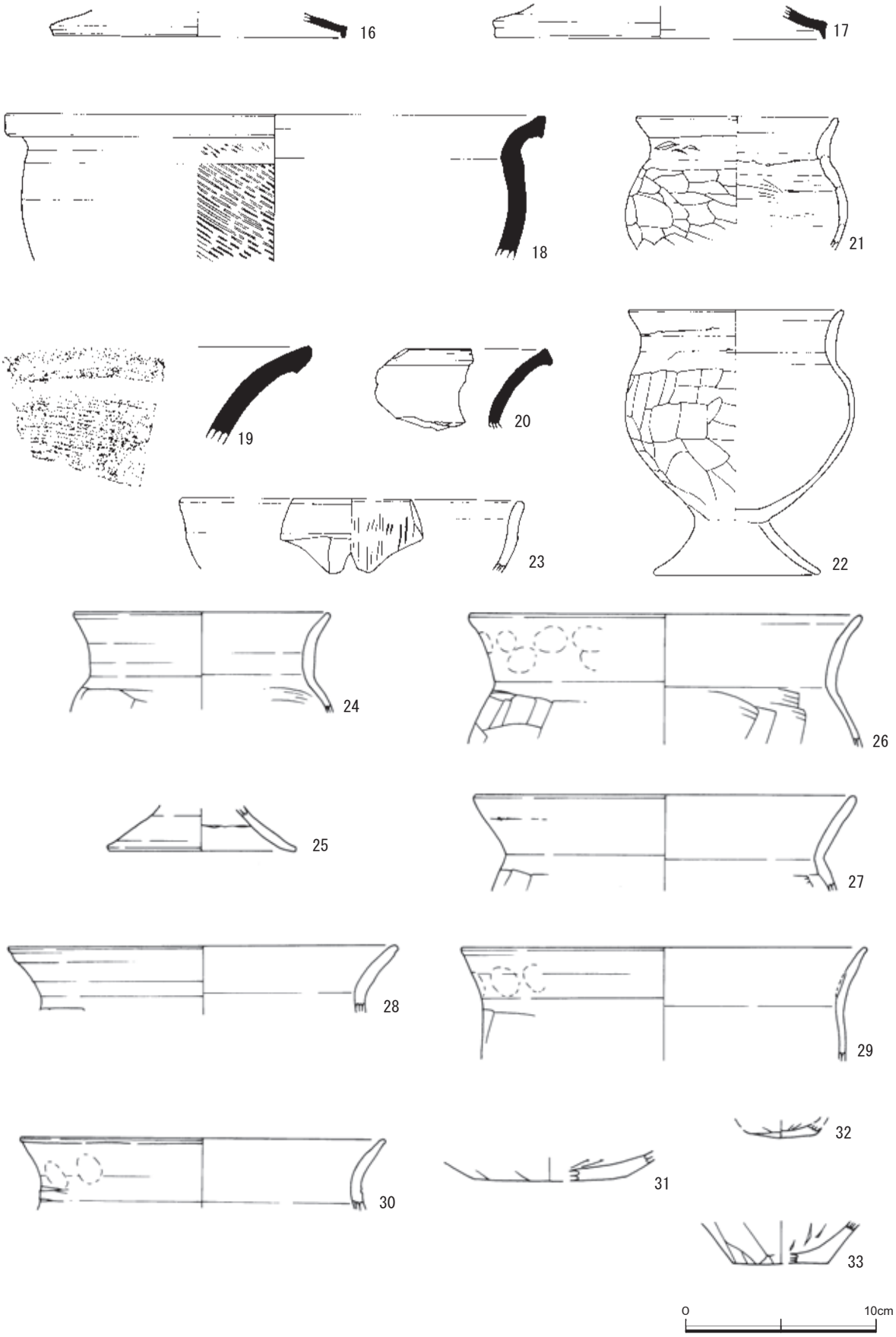


1号住居跡カマド土層説明
1　暗茶褐色土　焼土粒を微量含む。
2　暗茶褐色土　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。やや粘土質。
3　暗茶褐色土　焼土ブロックを多量、ローム粒を微量含む。
4　暗黄褐色土　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。

第35図　２号住居跡カマド実測図



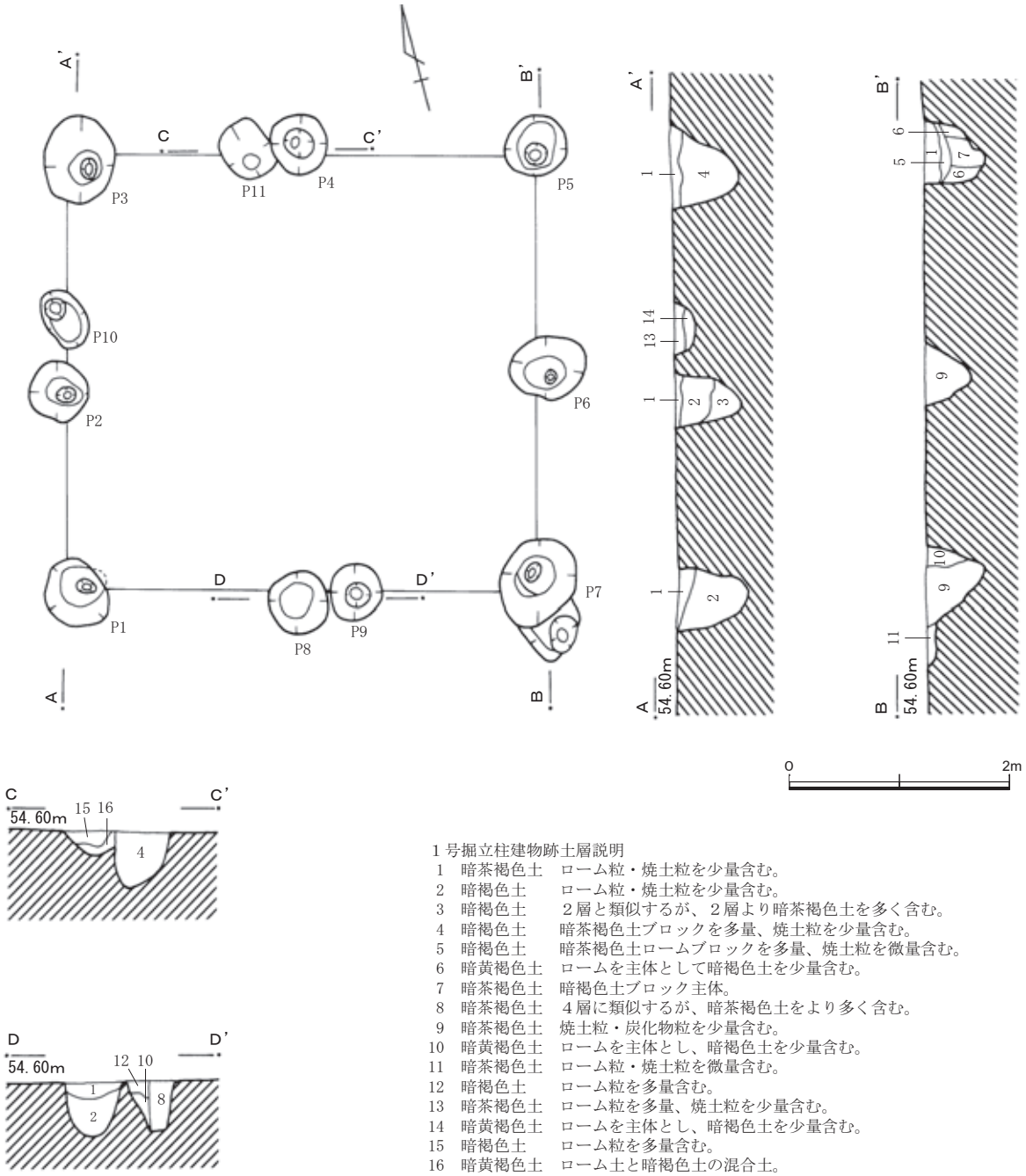
第36図　２号住居跡出土遺物実測図(1)



第37図　２号住居跡出土遺物実測図(2)

2号住居跡出土遺物観察表

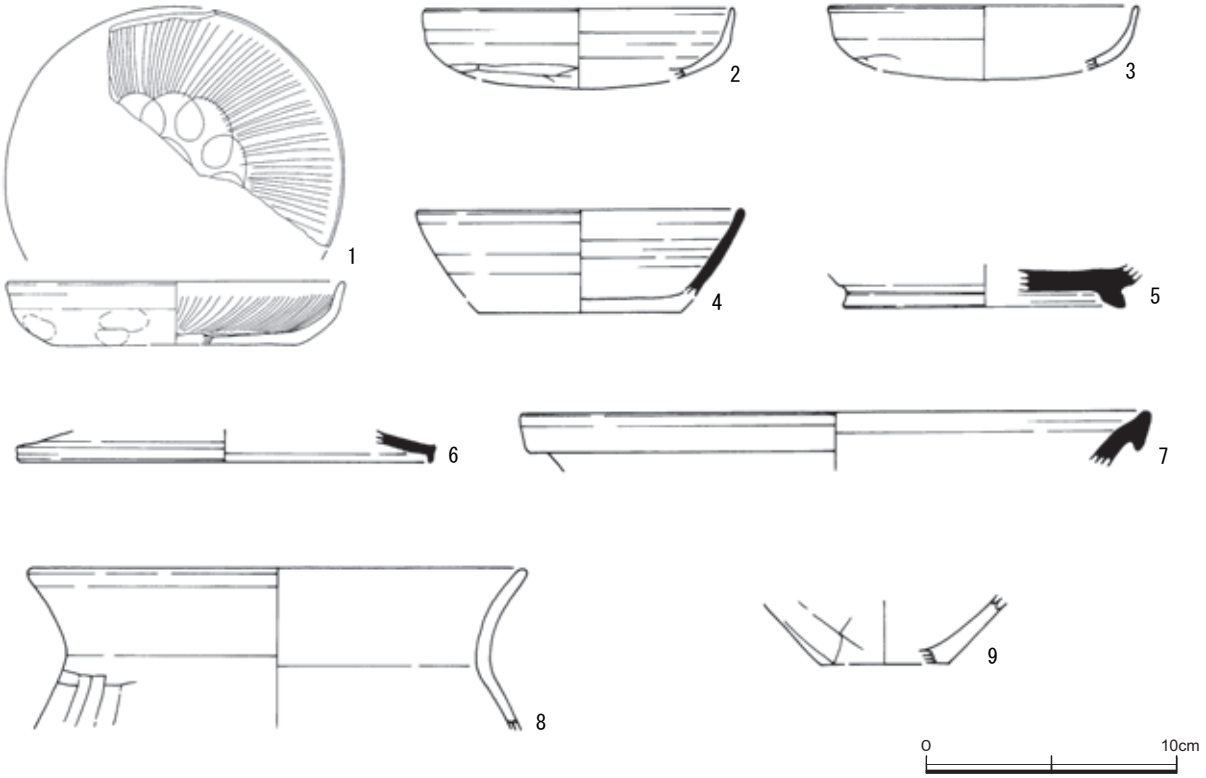
番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(13.7)	(2.7)	(10.0)	赤褐色	良好	雲母、微砂粒	図示10%	覆土一括、内面放射状暗文
2	坏	(13.7)	(2.3)	(10.8)	赤褐色	良好	雲母、微砂粒、角閃石	図示10%	覆土一括、内面放射状暗文
3	坏	(13.5)	(2.5)	－	淡赤褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示10%	覆土一括、内面放射状暗文
4	坏	(13.6)	(2.3)	(10.3)	淡赤褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示15%	覆土一括、内面放射状暗文
5	坏	(11.8)	(2.8)	－	明赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	覆土一括
6	坏	(12.7)	(4.6)	－	赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示45%	図示
7	須恵坏	(12.6)	《3.0》	－	灰白色	不良	石英、黒色粒	図示15%	覆土一括、磨滅あり、末野産？
8	須恵坏	－	《2.3》	(8.7)	明灰色	良好	石英、長石、白色粒、海綿骨針	図示20%	覆土一括、底部回転篦ケズリ、南比企産
9	須恵坏	－	《1.4》	(9.0)	灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	図示15%	覆土一括、底部回転篦ケズリ、南比企産
10	須恵坏	(12.7)	《2.8》	－	青灰～灰褐	普通	石英、長石、片岩	図示15%	覆土一括、末野産
11	須恵埦	(14.9)	《2.7》	－	明灰色	やや悪	長石、黒色粒	図示10%	覆土一括、末野産
12	須恵埦	(14.7)	《3.1》	－	灰色	普通	長石、黒色粒、片岩	図示10%	覆土一括、口縁部内外面に沈線あり、末野産？
13	須恵埦	－	《2.0》	(9.5)	灰褐色	不良	石英、長石、砂粒、黒色粒	図示20%	覆土一括、静止糸切り未調整、末野産？
14	須恵高台埦	－	《1.7》	(10.8)	明灰色	やや悪	石英、長石、白色粒	図示15%	覆土一括、高台貼り付け、末野産
15	須恵蓋	(14.8)	《1.1》	－	灰色	普通	石英、長石、片岩、黒色粒	図示15%	覆土一括、末野産
16	須恵蓋	(15.0)	《1.3》	－	灰褐色	不良	石英、長石、片岩	図示10%	覆土一括、磨滅著しい、末野産
17	須恵蓋	(16.9)	《1.7》	－	暗赤褐色	普通	石英、長石、片岩	図示10%	覆土一括、末野産
18	須恵鉢	(27.7)	《7.7》	－	灰色	普通	石英、長石、片岩、黒色粒	図示10%	覆土一括、外面平行叩き後回転ナデ、末野産
19	須恵甕	－	－	－	明灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土一括、外面平行叩き後回転ナデ、末野産
20	須恵甕	－	－	－	灰橙褐色	不良	石英、チャート、砂粒	破片	覆土一括、磨滅著しい、末野産
21	台付甕	10.3	《7.0》	－	暗赤褐色	普通	石英、雲母、微砂粒、角閃石	図示90%	図示
22	台付甕	(11.0)	《11.1》	－	明橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示90%	カマド図示
23	鉢	(17.5)	《3.8》	－	淡赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示５%	覆土一括、内面放射状暗文
24	台付甕	(13.1)	《5.2》	－	赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	覆土一括、磨滅あり
25	台付甕	－	《2.3》	(9.6)	赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示30%	カマド一括
26	甕	(20.2)	《6.8》	－	明赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示15%	覆土一括
27	甕	(19.6)	《5.0》	－	赤褐色	普通	石英、長石、雲母、微砂粒	図示10%	覆土一括
28	甕	(19.9)	《3.4》	－	赤褐色	普通	石英、角閃石、白色粒、微砂粒	図示15%	覆土一括
29	甕	(20.9)	《5.9》	－	赤褐色	普通	石英、角閃石、白色粒、砂粒	図示10%	覆土一括
30	甕	(18.7)	《3.7》	－	暗橙褐色	普通	石英、微砂粒	図示10%	覆土一括
31	甕	－	《1.5》	(8.0)	暗赤褐色	普通	石英、微砂粒	図示25%	カマド一括
32	甕	－	《0.7》	3.6	暗茶褐色	普通	石英、白色粒、赤色粒、微砂粒	図示60%	覆土一括
33	甕	－	《2.3》	(5.0)	暗褐色	普通	石英、雲母、赤色粒、微砂粒	図示25%	図示



1号掘立柱建物跡土層説明

1　暗茶褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。
2　暗褐色土　　ローム粒・焼土粒を少量含む。
3　暗褐色土　　２層と類似するが、２層より暗茶褐色土を多く含む。
4　暗褐色土　　暗茶褐色土ブロックを多量、焼土粒を少量含む。
5　暗褐色土　　暗茶褐色土ロームブロックを多量、焼土粒を微量含む。
6　暗黄褐色土　ロームを主体として暗褐色土を少量含む。
7　暗茶褐色土　暗褐色土ブロック主体。
8　暗茶褐色土　４層に類似するが、暗茶褐色土をより多く含む。
9　暗茶褐色土　焼土粒・炭化物粒を少量含む。
10　暗黄褐色土　ロームを主体とし、暗褐色土を少量含む。
11　暗茶褐色土　ローム粒・焼土粒を微量含む。
12　暗褐色土　　ローム粒を多量含む。
13　暗茶褐色土　ローム粒を多量、焼土粒を少量含む。
14　暗黄褐色土　ロームを主体とし、暗褐色土を少量含む。
15　暗褐色土　　ローム粒を多量含む。
16　暗黄褐色土　ローム土と暗褐色土の混合土。

第38図　１号掘立柱建物跡実測図



第39図　１号掘立柱建物跡出土遺物実測図

１号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(13.2)	2.5	(9.6)	赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母、赤色粒	図示40%	P－7覆土、螺旋＋放射状暗文、在地産
2	坏	(12.1)	(3.1)	－	茶褐色	良好	石英、角閃石、雲母	図示20%	P－5覆土
3	坏	(12.2)	(2.9)	－	灰赤褐色	普通	石英、角閃石	図示15%	P－1覆土
4	須恵坏	(12.8)	《3.5》	－	灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示５％	P－3覆土、末野産
5	須恵高台付坏	－	《1.7》	(11.0)	灰色	良好	石英、長石、片岩	図示30%	P－1覆土、末野産
6	須恵蓋	(16.3)	《1.2》	－	灰茶褐色	普通	長石、片岩、黒色粒	図示10%	P－7覆土、末野産
7	須恵甕	(24.7)	《2.2》	－	灰色	良好	石英、長石	図示13%	P－2覆土、末野産
8	甕	(19.4)	《6.4》	－	赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	P－5覆土
9	甕	－	《2.7》	(3.0)	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示30%	P－6覆土

３号土坑

３号土坑は、調査区の南側に位置し、西側約0.9mに第２号住居跡が、東側約2.2mに第１号住居跡がある。

平面形態は楕円形を呈し、長軸94cm、短軸78cm、確認面からの深さ16cmを測る。主軸方位はN-63°-Eを示す。底面は浅い皿状でほぼ平坦である。

出土遺物はなかった。

１号ピット

１号ピットは、調査区の北西隅に位置する。

平面形態は遺構の北半分が調査区外のため全容は不明だが、ほぼ円形を呈するものと思われる。規模は直径54cm、深さ21cmで、断面形態はすり鉢状を呈する。

出土遺物はなかった。

２号ピット

２号ピットは、調査区の北西隅に位置する。

平面形態は円形を呈し、直径25cm、深さ31cmでほぼ垂直に掘り込まれている。

出土遺物はなかった。

３号ピット

３号ピットは、調査区北側のほぼ中央部に位置する。

平面形態は円形を呈し、直径30cm、深さは11cmで浅い。

出土遺物はなかった。

４号ピット

４号ピットは、調査区北東部に位置する。

平面形態は楕円形を呈し、長軸46cm、短軸40cmで、深さは12cmで浅い。

出土遺物はなかった。

５号ピット

５号ピットは、調査区の北側やや東寄りに位置する。

平面形態は円形を呈し、直径26cm、深さ30cmを測りほぼ垂直に掘り込まれている。

出土遺物はなかった。

６号ピット

６号ピットは、調査区の北西部に位置する。約0.6m南に第１号掘立柱建物跡がある。

平面形態は楕円形を呈し、長軸68cm、短軸55cm、深さ18cmを測る。主軸方位はN-36°-Eを示す。掘り込みはすり鉢状で浅い。

遺物は平底の土師器暗文坏、須恵器甕の破片が覆土より出土した。

７号ピット

７号ピットは、調査区中央部の西端に位置する。東側約0.4mに第１号掘立柱建物跡がある。

平面形態は不整楕円形で、長軸69cm、短軸44cm、深さ48cmを測る。主軸方位はN-14°-Wを測る。底面は北側に向かい深くなる。

出土遺物はなかった。

８号ピット

８号ピットは、調査区中央部の東端に位置する。西側約1.9mに第１号掘立柱建物がある。

平面形態は楕円形で、長軸65cm、短軸49cm、深さ17cmを測る。主軸方位はN-83°-Wを示す。底面はほぼ平坦である。

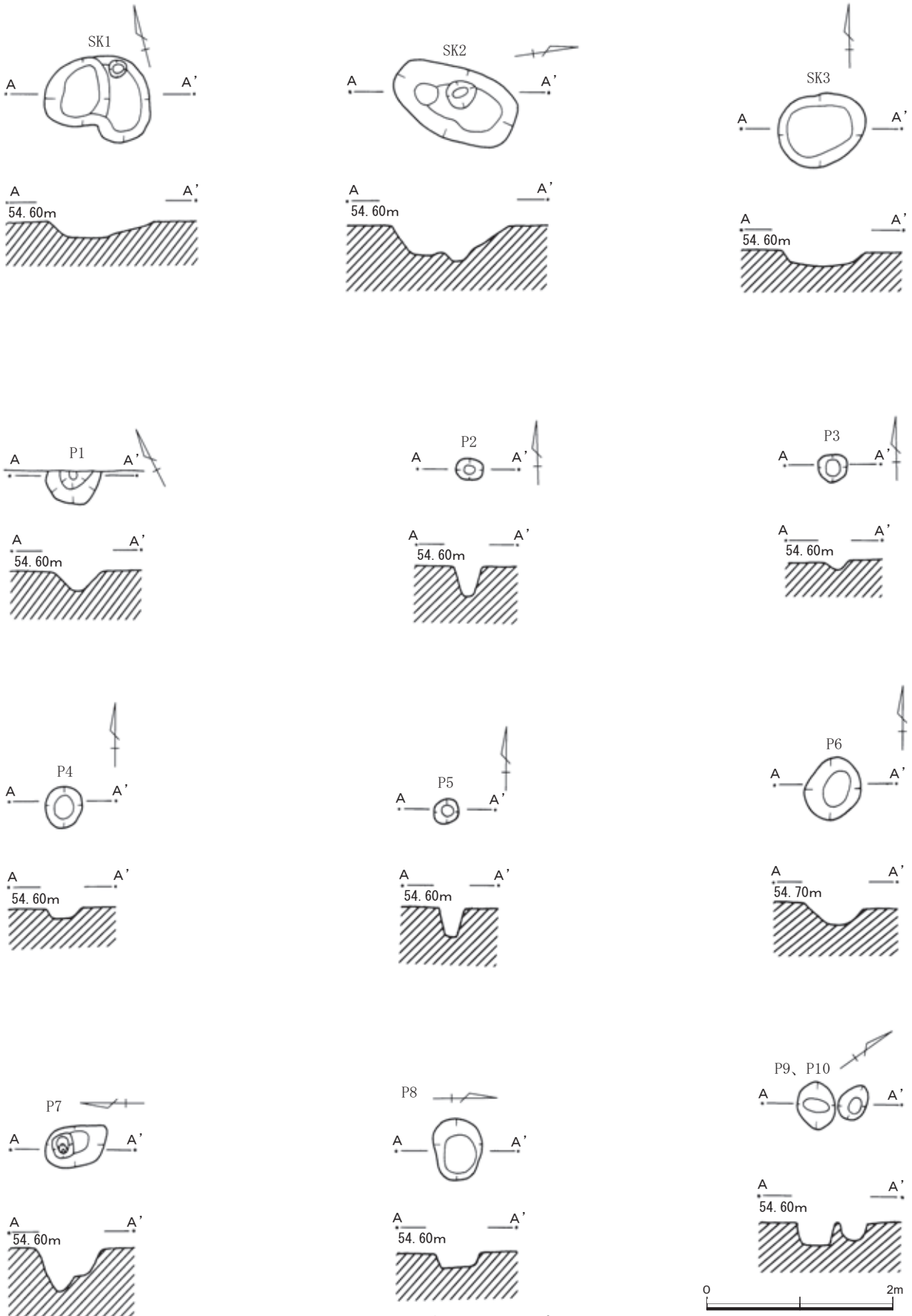
出土遺物はなかった。

９、10号ピット

９、10号ピットは、調査区南東部に位置し、南側約0.5mに第１号住居跡がある。

平面形態は楕円形で、９号ピットは長軸50cm、短軸40cm、深さ23cmで底面は平坦である。10号は長軸38cm、短軸29cm、深さ20cmを測る。

いずれも出土遺物はなかった。



第40図　１～３号土坑、１～10号ピット実測図

第41図　ピット出土遺物実測図

ピット出土遺物観察表

番号	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(12.3)	2.5	(9.0)	赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母	図示15%	Pit－6、内面放射状暗文
2	須恵甕	(22.9)	《2.2》	－	灰色	良好	石英、長石（粗い）	図示10%	Pit－6、末野産

Ⅳ　発掘調査のまとめ

1．142次調査

熊野遺跡の北部に位置し、重要な遺構が集中するブロックの一つにある。まず、すぐ北側の35次調査区では、竪穴住居跡２軒を連結した特異な形態の遺構が検出され、瑪瑙原石が出土している。その北方の131次調査では、1号住居跡と2号住居跡から畿内産土師器が出土している。特に１号住居跡は７世紀第３四半期の年代が与えられ、本遺跡成立期の遺構として注目されている。更に、本調査区南の47次調査では、131次１号住居跡に続くと考えられる竪穴遺構を検出した。多量の土器類が出土したが、須恵器類の器種の豊富さが特徴的であり、高盤等の出土量から、饗宴等に使用された可能性を指摘されている。

さて、142次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡１軒と掘立柱建物跡である。住居跡は７世紀後半と考えられるもので、遺物の量は多くないが高盤が出土しており、47次同様近隣で饗宴が催された可能性が更に高まったといえる。

掘立柱建物跡は、７棟が検出された。１号建物跡は３間×２間の規模を有するもので、８世紀第１四半期と考えられる。２号建物跡は、遺物は出土しなかったが、掘り方の規模が大きく、覆土の状況から古代に遡るものと考えられる。

2．154次調査

７間×３間の大型掘立柱建物を含む大規模建物群の南西に位置する。遺跡成立期の中心をなしたと考えられる建物群の周辺では、畿内産土師器が住居跡と性格不明土坑から検出されている。また、別の住居跡から『道乙朋道具伏状』と刻まれる紡錘車の出土も特筆される。

154次調査では、竪穴住居跡２軒と掘立柱建物跡１棟が検出された。１号住居跡は７世紀後半、２号住居跡は８世紀前半から中葉、掘立柱建物跡は８世紀中葉から後半と考えられ、それぞれ時期も主軸方位も異なっている。

なかでも１号住居跡は、先の大規模建物と同時期であり、主軸も近似する。さらに畿内産土師器の出土も特筆される。器形は丸底で口縁部の内彎は弱く、やや直線的にのびる。焼成は良好で、内面に螺旋暗文と放射状暗文が施文され、外面は箆ミガキが施される。大規模建物群とは若干距離を置くが、両者の関連性を示唆するものであろう。

引用・参考文献

・富田和夫他「熊野遺跡Ａ・Ｃ・Ｄ区」2002
　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
・鳥羽政之・武野谷俊夫「熊野遺跡Ⅰ」2001
　岡部町遺跡調査会
・鳥羽政之他「熊野遺跡Ⅲ」2004
　岡部町教育委員会

第42図　熊野遺跡142・154次調査周辺遺構図

写 真 図 版

図版１　熊野142次調査

調査区全景（西から）

調査区全景（東から）

１号住居跡

１号住居跡カマド

１号掘立柱建物跡（手前）・２号掘立柱建物跡（奥）

１号掘立柱建物跡８号ピット

２号掘立柱建物跡１号ピット

３号掘立柱建物跡

図版２　熊野142次調査

５号掘立柱建物跡

７号掘立柱建物跡

１号住居跡No.２

１号住居跡No.３

１号住居跡No.４

１号住居跡No.７

１号住居跡No.12

土坑No.１

１号住居跡No.20

土坑No.２～15

図版３　熊野154次調査

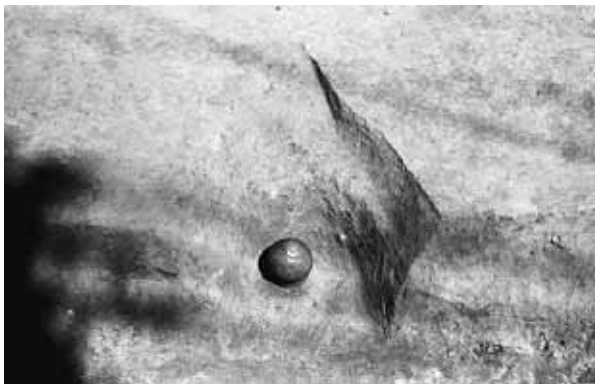
調査区全景

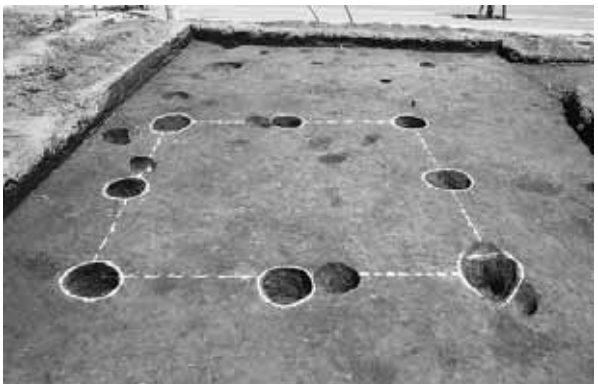
１号住居跡

１号住居跡遺物出土状況

１号住居跡カマド遺物出土状況

２号住居跡


２号住居跡カマド


１号掘立柱建物跡

１号住居跡No. 1

図版４　熊野154次調査

１号住居跡No.２

１号住居跡No.４

１号住居跡No.６

１号住居跡No.７

１号住居跡No.11

１号住居跡No.13

１号住居跡No.15

１号住居跡No.17

１号住居跡No.27

１号住居跡No.31

１号住居跡No.34

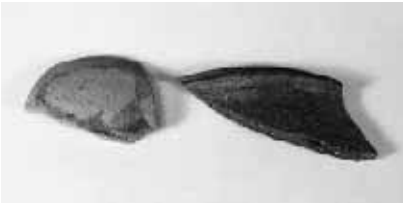
図版５　熊野154次調査

１号住居跡No.26

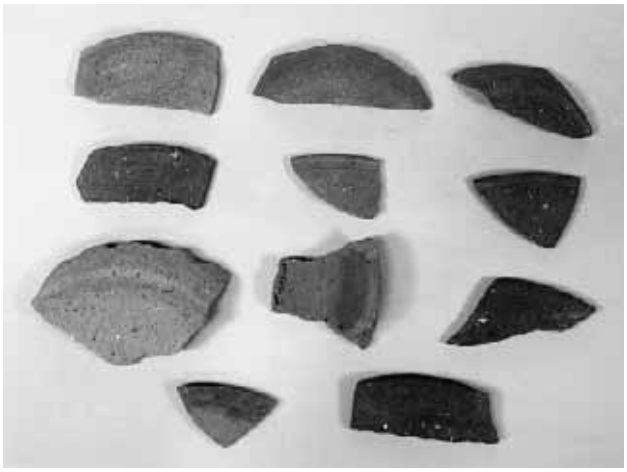
２号住居跡No.６

２号住居跡No.21

１号掘立柱建物跡No.１



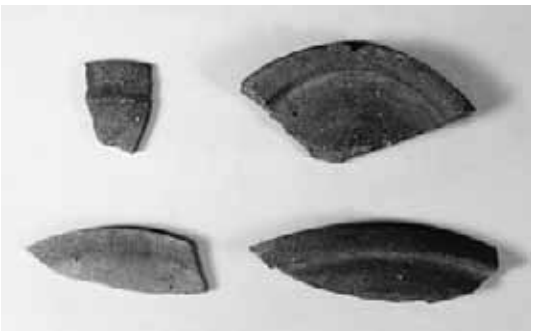
６号ピットNo.１・２



２号住居跡No.７～17

２号住居跡No.18・19

２号住居跡No.22



１号掘立柱建物跡No.４～７

報告書抄録

ふりがな	くまのいせき
書　　名	熊野遺跡ＸＩ
副 書 名	第142次調査・第154次調査
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第１１７集
編著者名	宮本直樹・竹野谷俊夫
編集機関	深谷市教育委員会
所 在 地	〒366-0823　深谷市本住町17番地３　　℡048(572)9581
発 行 日	平成22年３月31日

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
熊野遺跡（くまのいせき） (142次調査)	埼玉県深谷市岡（さいたまけんふかやしおか） 字前屋敷（あざまえやしき）3,049	11405	17	36°12′44″	139°14′27″	平成10年８月10日から 平成10年９月14日まで	456㎡	アパート

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡 官衙跡 居館跡	奈良～ 平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土師器 須恵器 石製品	

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
熊野遺跡（くまのいせき） (154次調査)	埼玉県深谷市岡（さいたまけんふかやしおか） 字内出（あざうちで）300-６　他	11405	17	36°12′28″	139°14′26″	平成12年５月26日から 平成12年６月９日まで	101㎡	アパート

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡 官衙跡 居館跡	奈良時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土師器 須恵器	畿内産土師器Ｃの出土が、特筆される。

熊野遺跡XI

2010年３月31日

編集発行　深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地３